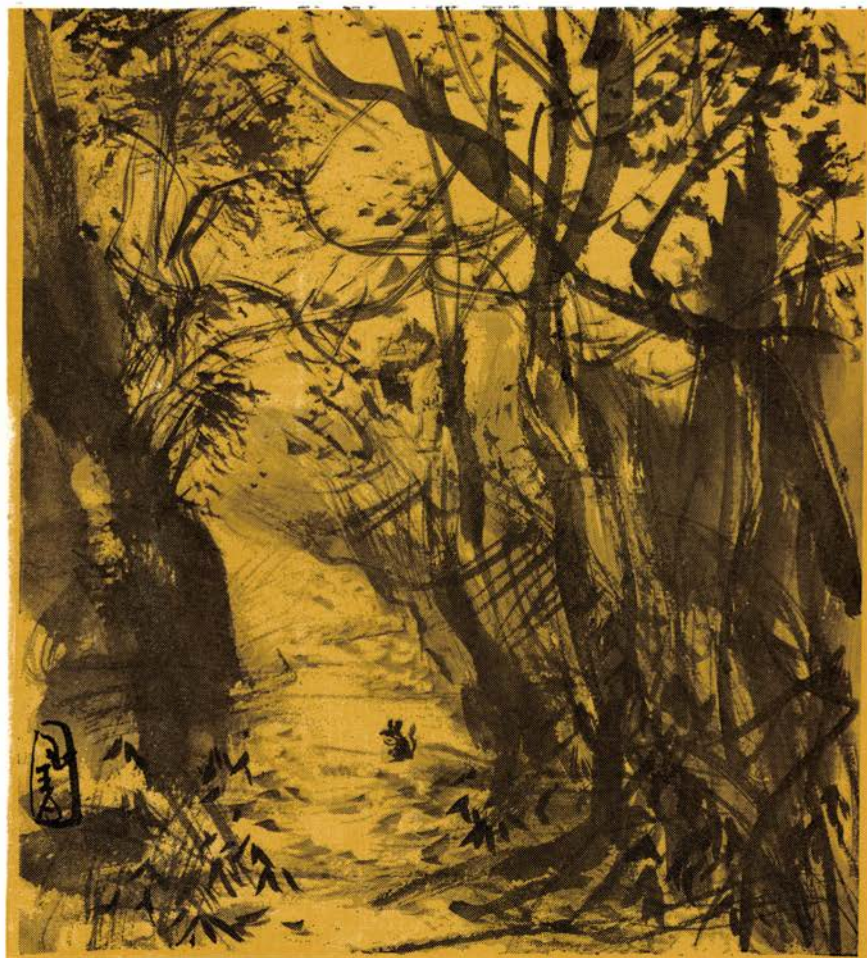


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十八年十月二十五日印刷
昭和四十八年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五五八号



No. 558

特集・はたらくうた

十一月号



ワンカップ大関

大関酒造株式会社

コップにはいったお酒

清酒一級（180cc）（1杯）ジャケッパック5本入り



田宮二郎

人気と実力で独走中

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚 焼 焼 餃子 叉 焼 饅 売

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL (641) 0551-2



〈出張店〉 なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストア／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

中島生々庵



深みゆく秋のしらせの青みかん
さんま食べ食べおろしだいこの値にふれる
俺の頭からっぽにしてゆく秋の空
稲うれて台風のない彼岸花
秋晴れだお墓詣りを思い立ち

ねかさみ積

京都での中華人民共和国出土文物展を9月28日やっと思学出来た。会場に入ると突然、夢の国が現実に見われたのであるからその絢爛さに驚く前に戸惑うのは無理からぬ事。しかし紀元前五千年といえは私達が幼い頃に聞いた天の岩戸や因幡の兎から計算して如何程の距離になるだろう等他愛もない考えで居ると楽しくなつて来る。ふと人波に押されながら我れに返えると全く無縁と思つていた神話時代と私とのつながりが、これはこれは容易

なものではないぞと気付くのである。たとえば、陶磁器一つとっても、うわ葉の色やおいを味わっていると、伝統というものの厳しさ、尊さ、そして現実というものが決して偶然に現われたものでなく、想像を絶するような年輪の積み重ねによる更新の稔りである事等、余りにもサイズが大き過ぎる故に、川柳をここにあてはめるわけにもゆくまいが、目先きだけこざしく伝統非伝統と頭を回転するのは、こそばゆくなつて来るではないか。

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

君が代へ姿勢忘れた日本人

本多清人

川柳塔十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

積みかさね

中島生々庵 (1)

むつかしい選句

長野文庫 (2)

川柳初篇研究 (百二十四)

(22)

前田喜代人・故岡崎 重義・清
川端 柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井 和雄
十府・岡田 甫

能面の眼

東野大八 (24)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

北川春巢選 (30)

一分間の柳論

久家代仕男 (47)

秀句鑑賞 (同人吟
水煙抄)

菊沢小松園 (59)

「旅人」以後の麻生路郎作品 (26)

橘高薫風 (42)

川柳中山道六十九次 (9)

富士野鞍馬 (44)

吐血した

高鷲亜鈍 (21)

むつかしい選句

— 欲しいコンピュター —

長野文庫

勝負のはっきりしているもの、例えば角力とか水泳とかマラソンとか、時に運不運がなきにしもあらずだが、大体の実力の差が結果に現われるから負けて納得がゆく、体操などでは多少の点差があるが、ルールがあるから判定に納得出来る。

併し、文学とか芸術とかは、見る目が同一でないからその判定が絶対と言えない。

例えば川柳の選句でも、甲選者はA句を最優とし、乙選者はA句を第二位とする、いやそれどころか同一句を甲は一位とし乙は没句とする場合さえある。

また入選は大抵の場合、制限数があるため、よい句と雖も落選することがある、これは入学、入社試験のようなもので、定数があるって或る数以上採れないから止むを得ない、自動車運転者試験のように合格点をとれば全員でも合格させると大いに違う。

かつて岡山県の直原七面山氏が「川柳撰別器」なるものを考案し、あたかもみかんを大粒、小粒に分けるように「これは満点、これ

はたらくうた…(同人特集) …紫香・喜由・柳志・一水・牧人・智子・君子…(37)

48年度同人総会…
清水白柳書翰集…
雀踊子・茶仏・一栄・花梢・正朗・静水・千代…(26)

西日本川柳大会余聞…
大陸川柳作家同窓会…
薫風・一三夫…(41)

初歩教室…
鉄児 奇童…(53)

大萬川柳「距離」…
垂井葵水…(47)

柳界展望…
柳井家…
柳井家…(54)

本社十月句会…
川村好郎選…(52)

各地柳壇(佳句地10選)…
新之助…(54)

「七五三詣り」…
(庸佑)…(56)

一路集「使いすて」…
谷垣史好…(60)

「劇 画」…
小野克枝選…(48)

編集後記…
高木桃里選…(48)

座右の句…
阿万万的選…(49)

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ (葎 乃) …(65)

私の句…
(二三夫・葉子) …(65)

倅な夫婦で欠伸うつされる

岩本雀踊子

は八十五点、これは七十点」と云う具合に採点、その順に従って定数を探ると言う機械ならざるキカイなものを発表した、この場合合格最低点の句が複数だったかどうか、ついに聞きもした。

とに角、選句が作家に与える影響はまことに大きい。採点制の句会では特に一句が運命を左右するのであるから選者にも仲々気苦労がある筈だし、後日選句が活字になって「こんな句を探っている」と批判されることもあるのでうかうかして居られない。選句の発表誌を読者はどんな気持で読むだろうか、「この入選句なら自分の投句が落ちたのも当然だ」と納得させる選句は仲々むづかしいものである。時に依ると自信の句が没となり、自信のない句が選ばれることもある、作者は一句入選した喜びと、選者への不満と同時に感じることを思う、

つまり、没句になって納得する場合、入選して喜ぶ場合と得心のゆかぬ場合があるのだが、みんなに納得させる選句はむづかしい。私は選句した場合、没句箋を全部持って帰り、発表誌が出るまで保存することにして、一つは句箋を見直して他日の選句の参考にするためと、一つは発表後、投句者から、「入選句と同一の句を提出したように思うが」という疑問に答えるためである。



若本 多久志 選

東大阪市 宮西 弥生

噴水の向うのロマンひとり見る
尽くすだけ尽くす女の愛 渦中
季の移りひとのうつりに似て愁う
いろいろと塗って美人に憧れる
紫陽花を浮気と名付くある日の揺れ

青森市 工藤 甲吉

公認の候補となつて面かぶる
秋の実をいただく両のてのひらに
こおろぎのひげがあわてる膝の上
落ち鮎のように定年退職し
登校の孫を送って職が無し

倉敷市 本田 恵二朗

波怒る漁港おろおろゆれている
その過去はどうあれ恋の目がきれい
干からびた心を慈眼にみつめられ
軌道修正気ままにやってひとり旅
底光りする年輪に魅せられる

倉敷市 水粉 千翁

雑草の歌を捨て石らしく聞き
おついでに返してもらう傘を貸し
種をまく土と呼吸が合うてくる
水墨の虹は悟りとして架かり
夜を囲むともし火一つだけの城

岡山市 川端 柳子

人命の重さを思う秋夜長
父方も母方もあり ボクの影
美しい汗に抱かれた募金箱
外灯も夫の足音待っている
良心の目覚めに自動扉開く

神戸市 小浜 牧人

扉一つ隣の顔も知らず住み
憧れを抱く少年の野球帽
定年の風は冷たく銀杏散る
喜びのじわじわ胸が熱くなり
道は未だ遠い心へ鞭を打つ

大阪市 山川阿茶

剣道の道具がついで女子学生

衣着てショルダーバッグの待夜僧

アルバイトの老人へ税金用捨なく

爪弾きのひとりへ秋の夜は静か

きかす人ほしい時あり三昧を持ち

香川県 三井酔夢

月光に恥じず一つの愛を抱く

月の宴飲めない人が横に座す

炎の輪くぐり抜ければ凡婦かな

一瞬のためらいゴキブリ逃げられる

秋風が吹くバカンスのごみの山

岸和田市 高橋操子

その中のきりようを選ぶ拾い猫

ならぬかんにんする気になった夜が白み

そこまでは割りきれませぬ対話する

小説になります過去をだれも持ち

我が家の食事恋しゆうなつて旅かえる

大阪市 有信新之助

気不味さは妻三角に飯をくれ

木石がそうでもなかった遺留品

よばよばまで生きる禁酒はやめにする

大の字に寝たのにえびになつて覚め

岡山県 浜田久米雄

敬老の日は長生きをせよと言う

妻と子と孫とがやがや言う余生

吉報が届いて秋が晴れ渡り

気不味さは字がかすれてるボールペン

秋夜長賀状の文句考える

新宮市 大矢十郎

幸せが余る女の愚痴を聞く

団地異変刑事事が越して来た噂

セールの笑顔暮しへ耐えている

宝くじ夫婦で買うて嘘がない

左手で玉転がして女プロ

泉大津市 村上春巳

ハネムーンパットの胸に裏切られ

ぎしぎしと身体がきしむ歳と知る

チャックまで言うこと聞かぬ朝であり

三代に仕えて奈良の墨を練る

口紅の美るわしくおわす吉祥天
出雲市 緑之助

新しい畳よ俺は明治人

胆っ玉社長でやはり先取点

津山城趾

石垣の草よ十八万五千石

院の庄

銅像も辛かる世相に噛み合わず
八幡温泉

せせらぎと山の朝霧湯にひとり

大阪市 川口弘生

弁慶も富樫もだんまり関趾 秋

女の子の軒どうなることかいな

秋風に貯金あるかとささやかれ

解かなんだナゾ平隠な二人で居

生きて来た信条だから子に折れず

岡岡市 高木桃里

二歩さがりまるくやさしい夢を撰る

終末と見えず紅茶が水に乗り

松茸の味は知らずに子は育ち

秋茄子も祖母の好みに漬け馴れて

寺の鐘故郷の朝へ落ちつかせ

東大阪市 久米奈良子

思索つきずぶどう一房食べ終わる

いねむりが上手になつて女ふけ

師をいたむ賛美歌雨は窓をうつ

父と逢う母をみつめる娘も女

毎日展にて

鳥取県 鈴木村諷子

この家のメンツに貯まる一円貨

主体性持たぬ男の比較論

わたくしの作った案山子にハツとする

東京が水足とはおもしろし

魂を洗うた涙 頬伝う

兵庫県 遠山可住

納得の足音となる酔うている

雅号とは似つかぬ顔と握手する

すず虫の触角へそろりそろり秋

内職の流れ母子の対話切れ

ころろとは違う握手をしてしまい

大阪市 大坂形水

遅くまで開けてる喫茶店知っている

プロにしてコチコチになる大ギヤラリー

留守の筈ない昼下り電話出ぬ

ふと去年の今日の日記を開けて見る

心配をさすことばかり云うて来る

豊中市 橘高薫風

ペディキュアの足を仏足頂礼す

瀆罪に似し中年のプラトニック

遍路杖納めセイルスマンの足

夢に見る父は父よりやさしかり

耳垢と耳学問をわびしがる

大阪市 不二田 一三夫

雨やどり京には京の軒があり

表札がゆがみ郵便にも見はなされ

西行はスパイ 芭蕉は忍者とか

落語界の大御所・古今亭志ん生死去(48・9・21)

志ん生という教科書が一つ減り
吉原の話をエンマも聞きにくる

宝塚市 傍島静馬

看病の妻たしかめてまた眠る

徒然に老妻とどっちが先に死ぬはなし
社を辞めてひとり歩きのままならず
パトロンとてれこにペルシャ膝にくる

広島県 高橋鬼焼

日曜のドラマへ廻る洗濯機

定年のない地下足袋の詩である
そっとしておこう無口にかえる妻
鍵っ子の積木へ母がいてくれる

和歌山市 垂井葵水

鈴虫に死ぬべき覚悟うかがえず
霧吹けば鈴虫夫婦身づくろい
白蓮のひらいて嘘のない空気
城番に落葉焚く日々始まりぬ

大阪市 正本水客

一人だけバス降りひとりの影を踏む
旅情の宿とある玄関に迎えられ

残雪のおもてを転がる風の色
古寺の雨ころぬくもるようにお茶

高槻市 若柳潮花

くずれゆく愛を渚の砂に置く
手まり唄団地に赤い陽が沈む

三階のテラスまで来て虫が鳴き

絵島、生島より

絵島かと呼べば流人の波の音

尼崎市 黒川紫香

淋しいね蜂も飛ばずに秋の壁
もう恋と云えずお茶のみ相手にし

志摩を巡る

川八の鰻遠くから匂い

鰻と蟹五ヶ所の宿は磯の風

大阪市 本多柳志

空即是色さとする歳頃色是空

加減して話せば割引して聞かれ

ダイヤ掘りつづけアフリカまだ貧し

ポスターで招いた海で泳がさず

倉敷市 小野克枝

頼りない夫婦だけれど笑い合い

子が画けば娘みたいな母になり

縫い合す糸があまりに脆すぎて

良妻になろうと思うお味噌汁

富田林市 岩田美代

もの差して計ると何もないひとり

鼻すじが通って情 理論じみ

それぞれの秋たずさえて居る孤独

倅せに招ばれる帯は松くずし

富田林市 木村弥栄子

しばらくで殻のチューブに似た定年
常識の手垢に染っている弱気

高いところ上って見えぬものもあり

坪単価とはかかわりのない雑草

大阪市 西出一栄

秋の音たしかに聞いた今朝の窓

大和路や黄色いうねりへ青い空

豊作の稲と対話の秋の風

パイロットの夢を駆けてるプラモデル

豊中市 戸田古万

毛網の由来髪をいのちとした頃の

弥勒生誕三十六億の一人として

山沿いらしう豪勢に降ってくる

休むとこへ来ると馬車馬休むなり

大阪市 福井野迷路

起きぬけに先ず額の字を顎で追う

初盆に来て眼の中に光るもの

近視とは知らぬ異性の視線よけ

人物評闇の烏だ模索だけ

三重県 川上大輪

灰皿へこんな捨てていた時間

匂いだけ残して妻は留守だった

大人から習った嘘を叱られる

散水車の不覚夕立に追い越され

八尾市 香川酔々

背に家紋おうて でで虫息が切れ

井戸に蓋されて落城の話秘め

戦闘帽老母の胸にある写真

ペランダの蔦紅葉し斜陽族

倉敷市 能登原白水

ほほ笑みがカンナの朱唇からこぼれ

蜜蜂の去るのを待とう花鋏

きき流す襟度が出来てから気楽

愛の芽がもうネクタイの趣味を知り

高槻市 福田丁路

夕立に消えた儂い蟻の群れ

あどけない孫のお洒落れに戯れる

標識の無い人生の曲り角

熟慮断行とんだ失敗

尼崎市 高津徹也

文化の日公民館の幕があき

ここよりは二路に分れて秋惜しむ

とうとつな返事がかえる秋の雨

夕霧にさからわずあり日本髪

桜井市 岩本雀踊子

野心持つような寝顔でない夫

テント虫とまる地蔵の泣きばくろ

くされ縁妻もそうだと思ってる

裏街と云う人生の鰯やく
和歌山市 野村太茂津

幕下りて勲記へ焦点なき疼き
勲章は別に拾うた九死の生
自負を見せ勲章拒否と傷疼く
割り切つて重い生命を叙勲式

倉敷市 谷井 扇水

生きる慾忘れた頃に叙勲され
朱に炎えているカタログに罪はない
献血へ飯の美味さもつけ加え
真っ赤にも染るが白のままで褪せ

榎原市 岩井 本蔭棒

丹精で嫁が作った秋なすび
妻の目が何やら恐い旅帰り
私の駄洒落へ誰も笑わない
雲助で渡った川をひかり号

西宮市 島居 百酒

解けぬ謎あるから神が存在し
耳よりな話の中の陥し穴
禁煙を余儀なくされたカークラー
あんな家欲しい散歩の行き帰り

岡山市 嘉数 千代香

若者の自由が三面記事を埋め
割り切った瞳が運命線を走る
子の船出母灯台の灯となりて
芋ばかり食べた日もあり芋を掘る

平田市 久家 代仕男

潔よい言葉の端に見る未練
合駒の効かぬ立場に居て深慮
秋風を親の無い子が走り抜け
子を死なし若妻童歌を口にせず

下関市 石川 侃流洞

花に埋れ花屋季節を知らず売り
蔵ざらえ予約の札が多すぎる
巡航船欠航島の灯が暗い
三者から見ればチャンスが多すぎる

松江市 舟木 与根一

リーダーの娘はソバカスでましくし立て
スード観て燃えない歳にあわてたり
第六感はずれて欲しいとき当り
清貧も心に詩があれば耐え

愛媛県 渡辺 曉童

かんむしが起きそう百事意に反し
良い酒だったとはお通夜の席のこと
人蔘の色あざやかにたべのこし
再起を夢につながれた船

岡山市 直原 七面山

白鳥の群船団の如浮ぶ
貝の蓋あければ潮の香がこぼれ
血を給いし人の心の尊かり
潮水のしたたる桶を抱く海女

鳥取市 河村 日満

映画「花を売る乙女」より

生きるための花はそぼそと今日も売る

薬手に母の死をまだ知らぬ唄

姉を呼ぶ声寒むざむと山を越し

死んだ筈の兄の温みへすがりつき

手を振って幼い顔になる別れ

ふり返る母をさえぎる刑務所の塀

皺が寄りそうで美人笑えない

水郷に生き喝水の貰い水

青年の意気や朴菌の下駄の音

銭湯をゆったり出ればいい月夜

秋深く噂の女の面やつれ

いい年をして口笛吹いてはる

心では済まぬが軽い浮気する

目と目老妻は心得る

妻に死なれてひとり老けてくる

友の訃を聞く心ゆれる秋風

さんづけで呼ばれ私は何んでも屋

食べんでも済む日曜の居留守かな

五十五の手習い部屋中匂う百合

長生はしたし煙草の量が増え

藤井寺市

西

いわを

昆虫を集め八月棒に振る
事此処に至りてはと辞意洩らす

南極の果へも男夢を追う

仲秋の月を賞で

名月へ艶々とした薄の穂

サハリンと呼ばれて久し樺太よ

それぞれに秋の影曳く小石かな

天皇さまもイメージチェンジ秋近し

この主に見せようとての鳳仙花

虫けらにされた掌がふるえている

身勝手なお人だったと石洗う

さりげなく別れて虫の音がつらい

合鍵を渡して愛をたしかめる

酒もすきわけて四畳半すきな父

前途遼遠やとお茶まで誘い出し

年長者乾杯だけに床柱

正当を吐けば変骨者にされ

名月へ向って気持のよい放尿

大自然の神秘風と木の対話

砂と汗にまみれて楽しサンドスキー

松江市

柳楽鶴丸

松原市

谷垣史好

島根県

藤井明朗

竹原市

山内静水

誕生日を迎えて

地球号に乗って太陽を四十五周

大阪市 神谷 凡九郎

生命確かに今は生きている安緒

キャンパスに何描くつもり朝の靴

乾杯をしようよ とにかく今日暮れた

女は男男は女解けない謎を解く興味

神戸市 仲 どんたく

送り水を大と描きて盃に受く

ビニールの中でとまとは季を捨てる

指つめる裁き人生の裏に生き

岸壁のテープが切れて無が残る

松江市 岡崎 祥月

鬼ごっこしてる人生運不運

耐えしのぶ心 和と和を結ぶ糸

人は人俺は俺なり俺の道

司削大会に出席して

駅下りて人の目を射る恩師の句

富田林市 板尾 岳人

陽が落ちて杉と喋べりに来た疲れ

滝つぼに山の執念澄んでいる

吊橋がゆれてみどりもゆれている

足元へにゅうと出て来たかくれ滝

笠岡市 木山 遠二

日の丸を揚げると雲が美しい

かしわ手や東の空はありがたし
赤トンボ遊ぶに馴れし西の空
敬老の車に老が拾われる

今治市 越智 一水

おでん屋できさまと俺にウソがない

日本人だからうちの風愛す

貧乏を愛しあわれな詩をつくる

からっぽの頭平和な日を受す

島根県 堀江 正朗

うっかりと踏んで見つけた探しもの

月が出てそこまで妻と虫の声

一服のお茶俵せな朝が湧く

ふっと手を放して妻は立話

米子市 八木 千代

通院の老母ヘドレスの柄を撰る

ベッドから予防法など聴く見舞い

銀婚の道探り合い認めあい

距離置いて炎の視線投げる女

米子市 林 瑞枝

明日はもう逢えぬ別れへカンナ燃ゆ

背伸びしてその足元をすくわれる

ウーマンリブ家の主めく座りだこ

誰がさすあてない番傘干す陽射し

大阪市 金井 文秋

雑草のイデオロギーに教えられ

安住の座に居て女房太りだし

黒部の旅

ロープウエー谷は緑の魔術見せ (黒部平)
極楽の空気もかくや弥陀ヶ原 (弥陀ヶ原)

大阪市 宮 尾 あいき

文案観劇

天の網島昔の女の良さに泣く
コホロギを引あいにして愛のささやき
たいくつをするとう亡夫へ香をたき
わびしさが身にしむ夫の一周忌

大阪市 河 野 君子

故郷の実家に帰えって

逢いに行くただそれだけの父母に孝
土の香が消えぬ馳走の膳に和し
過去帳へ絆の深さかみしめる
墓地に佇てば白雲ゆうゆう明日が待つ

大阪市 小 出 智 子

鏡の中の瞳を信じて生きている

まじまじと見れば仁王さんはにかみや
一人ずつ帰る夜更けの台所
笑い合う家族があつて明日がある

大阪市 柳 原 静 香

娘夫婦に誘われて

割切りつて病夫へ済まぬ旅に出る
据え膳に座るも主婦の夢なれば

小松川柳大会に出席して

誘われて付録のようについてゆき
灯を消して家族を想う旅の宿

松江市 小 林 孤呂二

羨きびしい父であり逆らわず

青空があるから僕の斗志燃ゆ
雑魚であれストの一人として強し
盃に詩ありなみなみ酌ぎ酌がれ

姫路市 大 江 秋月

旅楽し家の構えも北の国

助太刀がそばに居そうな電話口
地球儀で見る日本に左派と右派
眼帯を外せば空気がまできれい

岸和田市 福 浦 勝 晴

嫁ぐ日へ織る手をとめて指を繰り

チェホフ読む芝生に風が戯れる
太陽を信じまっすぐ歩く人

アカシアの舗道で赤いビラを呉れ

竹原市 森 井 菁 居

孝行の真似ごと父の主義に添う

少年の指へ素直なかぶと虫

たくらみを捨てて美味しい酒となり
騒ぐ子がじっとしているから案じ

倉敷市 松 下 梁 水

駄馬として今朝の一步を踏みしめる

堂々と泣く栄光の貌である

六法にない人生の急な坂

一点の差へくい下がる応援歌

大阪市 河井庸佑

芸術の秋わたしは食べる秋

家中が思い思いの日曜日

出る杭は打たれる覚悟ですわる椅子

天下る段取りついて職を退き

氷見市 関美子

見返りの日々を日向ぼこ日向ぼこ

おでんぐつぐつお疲れさんの遅いこと

追いかける夕日どこまで無蓋貨車

自説どこで曲げよか参観日

西宮市 藤村ペ女

風鈴の夏さまざまの夢をとじ

咲きたわむ萩に蜥蜴も揺れている

夜明けても話たりない久しぶり

秋が来て拝んで見たいも仏かな

奈良市 宮口笛生

御詠歌の音痴へ亡母の笑み給う

亡母の声聞えてきそう離れの灯

さびしさや亡母の遺影のまだ若く

線香のけむりの行方亡母偲ぶ

郷愁の月を眺めているベッド
大阪市 河股緑水

正義なら勝つと決めてるのんきもの

初めてのキッス地球が止まってる

盆栽にされて根づいて気が付かず

大阪市 児島与呂志

好きだとも云わず仲のいい夫婦

気を使う心が愛として見られ

あわててる背中を妻に叩かれる

逆うらみされた朝の目腫れている

倉敷市 藤井春日

ニヒリスト人の情に背を向けて

盃を受ける手つきにある色気

もの淋し人また恋し秋の夜の

京の宿裾の乱れや酒の味

東大阪市 竹中肖二

人混みの中に孤独な下駄の音

帰農して先ずは社頭に頭垂れ

鹿寄せの笛神苑にこだまする

燈籠の蔭から鹿が今日は

松江市 恒松町紅

倅せな夕餉のあとの妻楊枝

民話など聞いて素朴な宿の秋

命預けます国道時速六十キロ

男嫌いなどと化粧に念が入り

スケッチブック描く無心を覗かれる
大阪市 中川滋雀

ころ満つ詩書が手にある帰り道
長針は十倍働くものと決め

無作為の一人にされたアンケート

大阪市 福井多蘭子

金鷄勲章手にとり八月十五日

老いの夢戦場をかけめぐり

山道を横ぎる小川の湯の匂い

赤富士が終日見えて旅終る

倉吉市 渡辺善句

それから正確に薬飲み続け

病んで気が付く窓に咲く合歡の花

病んで見る夢思ひ出せぬものばかり

長病みにうらやましいというお世辞

八尾市 飯田悦郎

地球儀の朱色悲しく汚染する

黒眼鏡笑うた自分の恐い顔

響かない鐘を独立して鳴らす

秋になるムードとなつて落葉する

大阪市 室谷徹舟

次女拳式近づく

手折られる花へのしまでつけて親

嫁ぐ荷に囲まれ幸を噛みしめる

して欲しいしてやりたいと荷を作る
誰にでも話しようなる嬉しい日

八尾市 大路美幸

何事もなく平和に負けそうだ
小旅行終つて畳へ大を描く

台風接近隣も小さな釘を打つ

戒壇をまさぐる欲の手が動き

東大阪市 芥藤三十四

職業欄無職と書いてふと佗し

十円の金貨があったよい時代

定年者募集とあるは別荘番

幼児の放屁へ診察室和む

岸和田市 葛城伊三郎

君が代を歌えば太鼓二つ鳴り

無防備を叫ぶ男に髭があり

親の眼をまさかと思う子が盗み

鷹の夢見たがよい事やつて来ず

岸和田市 神藤歌子

手のひらの上で思案のにぎりめし

退院のうれしさ一番風呂に入り

針箱に母の手垢がしみており

庭で鳴く虫にもそれぞれある個性

羽曳野市 塩満敏

成らぬ恋心重たく嘘を云い

想い出の浜は工業地帯に交り果て

C・Mを器用にまねて子は育ち
結局は自己弁護する処生術

呉市 植田英詩

口笛に乗って機嫌な父帰る
末っ子が嫁ぐまで生きていたい欲
共稼ぎ内助の功もして欲しく
幸運な星座私に過ぎた人

岡山県 出原敬一

七草の色増し水車朽ちたまま
窓の月まるく人恋い物想う
過ぎたるも不幸美人をもつ亭主
警察の奥で昔の声がする

倉敷市 野田素身郎

淋しがり屋の僕に深酒強い秋
秋は来ぬ髪まばらなる頭より
読書の秋へ老眼鏡を買い変える
深夜一人かきこむ茶漬けの音高し

大阪府 飛田好一

体験の生の話が胸を突き
深入りを後で気の付く日の不覚
三恩を教えた明治も遠くなり
夏さらばちよっぴり降った涙雨

柏原市 大峠可動

くちびるを嚙んで運命の灯に耐える
飛行雲末広がり詩ひらく
無から発つ夫婦まっすぐ坂を行く
城に住む夫婦となって灯が育つ

京都市 松川杜的

嵯峨野にて
竹径に竹の店あり直指庵
視野一つ直指庵は竹の青
どう見ても秋の雲です雪の色
目標が二つ余命を意識する

松原市 玉置重人

燃え尽きて見たい日もあり女坂
よそさんの盆栽カッコよく曲り
嫁ぐ娘に妻主役のように疲れ
娘を飾る荷へ父の汗母の汗

竹原市 時広一路

鮎はねる川嬉しくて裾まくる
落着かぬ心が誘う海の詩
貝殻の過去は渚で消えてゆく
真心に触れて眠れぬ夜となり

鳥取県 森田布堂

寝不足の電話の声を見抜かれる
コスモスの風に倒れたままで咲き
大山に雪沢庵が漬けられる
網棚は梨・梨・梨の満員車

大阪府 江城修史

義兄逝く

老ゆる身へ追打ちかける絆の計
幸福に見える女のやつれよう
真実も嘘も詠って趣味の道

さよならの余韻が夜を長くする

鳥取県 清水一保

骨皮にやせても鬨志脈を打ち

お国はと問われ梨の物語り

水不足無常にまばたく星悲し

胃を切ってから人生に運めぐり

島根県 小砂白汀

花びらに搔癢走るとき受胎

触れあえば傷つくところにも触れやすし

秋なれや やもめカマキリ人を恋う

男性の感度をここにくすぐられ

守口市 羽原静歩

ダムの底見せ台風待ちわびる

一夜漬あっさり亡母の味となる

富士五湖めぐり

ピンカール乙女道路の秋の彩

たたずめば十国峠の風となり

京都市 都倉求芽

日まわりの入道雲に届いた気

のど仏が小踊りしてる大ジョッキ

仕事する汗に飾り気のない光り

冷蔵庫だんだん開けなくなつて秋

枚方市 宮川珠笑

大の字に板の間で寝る夏の酔

云い負けてきつた受話器の納らず

週二日休むわたしの部屋がない
雀荘を出て十五夜を思い出し

堺市 高橋千万子

第六感すくわれそうな金魚逃げ

さわやかにラッシュを泳ぐパンタロン

ひざに来る孫に雑念吸いとられ

帯きりり締めて女に秋が来る

島根県 景山綾美

皆生温泉にて

潮の香が部屋一杯に朝の宿

満月が夜汽車と走る湖の上

過疎の贅沢鈴虫に取巻かれ

つつましく燃えて咲いてる狂い花

富田林市 和田維久子

仏縁ほのか初対面とは思つてず

初恋はまだ去りやらず雲を追う

ぐうたらな父を無言で責め続け

吹けば飛ぶような倅あたためる

大阪市 西川誓二

一期一会に甘い性根を叱られる

あせらずに追い上げていく亀の意気

柵にはれ憂さも晴らせる縄のれん

指繰れば冥土の児にも嫁が要り

親馬鹿 出雲市 原独仙

秋涼し布団素肌へ抱き寄せる
逆境の友へ秋風そつと吹け
風鈴を虫籠に替え同じ釘
月詠んだ頃懐かしむ古日記

島根県

梅

みどり

足して二で割る幸せな日を送る
節々へよぎる初老の佝びしさよ
さみしさに酔うた夜長へ虫すだく
朝顔は色さまざまな露をうけ

大阪府

本庄金三

水不足のまま淀川へ秋の風
スリッパを揃え見合に来る日なり
脱退をして部外者で居る弱み
門限へ程よき所にある電柱

大阪府

藤田頂留子

住みにくいにようこそ今年もちちろ虫
道草が過ぎたと秋のいそぎ足
おつきあい秋も物価も天高く
水の無駄限界知れと天の慈悲

門真市

福島鉄児

生きてても先きは知れてる魚好き
和服着て女は夏に耐えている
夫唱婦随四十年の情性持つ

岡山県

浜野奇童

織姫の遊ぶ夜空へあこがれる

ありがたい訓えへ心乱れて来
ひとり酔うコップへ孤独の眼が写る

伊丹市

小川静観堂

赤い髪の赤さに酔うた洋画展
つのかくしより黒枠に見入る月日
信長に亡ぼされた先祖のお墓いまどこに

東大阪府

本多清人

両親と対話墓石を洗う汗
悔いのない汗は拭おうともしない
五分五分の力を運が左右する

守口市

村田瓢太

蛇口ひねれば水ほとばしる嬉しさよ
或る日ふと人聞不信となる孤独
今晚もつづきを見たい程の夢

大阪府

天正千梢

地鎮祭借金の額を忘れかけ
戻りを計算した奉仕受け
吐き出してしまいわなしさだけ残り

大阪府

神田秀峰

マンションの女に寄れぬ恐さあり
柵越えて撮った写真が賞に入り
ささやかな買占め冷蔵庫に満たし

柳井市

弘津柳慶

姑へのレジスタンス水道を強く出し
歌謡曲ブツリ切って老夫婦

秋場所のテレビに帰り早くなり

大阪市 木村水洞

ささやかな慾を求めて宝くじ

生も死も天にまかせて糸を垂れ

中秋の月に解け合う嫁姑

宇部市 平田実男

運動会子がスタートにいる動悸

俺のための白髪もあろう抜きながら

老人の日のプレゼントと云う不満

大阪市 今西章雅

初步的な失策氣負い過ぎをはじ

人生観問われる事もなく生きる

仏壇は土地を売れとも売るなども

富田林市 浅川八郎

四つんばい気分和らぐ昨日今日

這い出でてペランダ越しに雲の色

流れゆく紫の雲阿弥陀様

生駒市 草深醉升

ねそびれて一匹の蚊と対決す

『橋立、蘇洞門めぐりバスツアーにて』

犬戻り昔は濁流岩を噛み

青葉山聳ゆるあたり鳶が舞い

東大阪市 桑原喜風

一本の細道夫婦でかばい合い

かたくなに渡る世間に余韻なし

阿呆にもなれぬ勝気を持て余ます

倉敷市 竹内翁童

誠意がサービスと正価ゆづらない

反省をするより未練が先にたち

親子だから断絶のすさまじい

兵庫県 河原みのる

北海道とどこどころ

時計台明治の顔で逢うてくれ

大志抱く余地がありそな北海道

飛ぶどこか見上げて眩むジャンプ台

東大阪市 竹中綾女

しあわせを約束されぬ敬老日

強がりへ労わりの言葉かけそびれ

昔話する老人の瞳が光り

竹原市 小島蘭幸

百三才生きていることがうれしくて

いい湯だな一番風呂という我が家

秋の味覚並べて熱燗もう一本

愛媛県 村上旭童

追れても雀に稲の穂がつづき

作業服それが一番似合う服

難かしい言葉で図鑑花が咲き

堺市 藤井一二三

お得意の夫人へL寸送られず

浮草の執念杭に絡みつき

同じ名が重役として電話帳

岡山県 池田 古心

赤い爪男の生血で染めた彩

長髪へ苦勞買えとは馬鹿けてる

誇り持つ家紋へ老いの一徹な

諫早市 原田 明春

陳情へ顔役らしい顔でいき

俺が養子でウーマンリブに拍車掛け

ビルが建ちうちの太陽盗まれる

広島市 山田 季賛

旅終えて疲れをほぐす妻という

横車押して仕事の虫になり

安住の地を決めタンポポ根をおろし

大田市 藤田 軒太楼

夏山へ心の汚染捨てにゆく

聞一髪ホームスチールの醍醐味

サイクリング実る稲穂の中を抜け

鳥取県 谷 無閑

妻にすりや夜釣りの友が気にくわず

信濃路にて

信濃路は金飯金を土産にし

善光寺

土下座して尼宮さんの珠数をうけ

島根県 中島 英子

満腹のゴキブリ死んだふりをする

使いすて明治の肌にとけこめず

すばらしい建築大工の名をきかれ

新宮市

プライドの錯覚へんな背のびする

友情と別きびしきは生きる道

五つほど若く売りこみデートする

大阪市

更年期愚痴は云わない誓い立て

しあわせにひたれる軒横にある

虫の音に小言飲み込む母達者

小松市

田園の車窓へ緑の風まとも

轢き逃げを見ていた星は喋べらない

八尾市

地球の虫丸い回みで日々をもめ

芦別事件正しく裁けば首がとび

菊沢 小松園

疑うてうたごうて寡婦礼を言う

電気菊無理を承知の色で咲き

海洋博のことなど知らぬ鬼ひとで

うしろから見れば何んでもない奇術

漂うていても浮草考える

若本 多久志

敬老の日(一句)

ピフテキの宴敬老の日の集い

のんびりと会長として重役会
うん、うんと頷くだけが大役か
会長室閑散として句に浸る
旅心誘うたよりが木曽路から

北川 春 巢

髪栗に染めて六十若返り
医療保護の入墨へ医者目をそらし
すり切れた服で大法螺吹いて去に
見てあれば肥満児なるほどよく食べる
五十万かかった入歯抜いて見せ

川村 好 郎

空蟬の軽さを秤る手も細り
わけ聞けばここにもお宮に似た女
これからと思う日もあり自惚れか
晩鐘の余韻歌人ならずとも
メーキアップ効かぬ夫婦でつつがなし

西尾 葉

名産をほめりや朝、昼、晩と出る
民宿は名産という嵩で盛り
バックオーライ大きな獲物蟻がひく
膝を抱く癖も恩師に似てきたり
肉親やからいう親切のエゴイズム

近 詠

須坂市 高峰 柳 児
しんみりと合掌煩惱別におき
旅の恥かき捨て酔いの余勢かる
激動へもう通じない座右銘

大洲市 米 沢 曉 明
残業の帰路をねぎらう虫の声
外遊を実感にするパスポート
体育は諦めている通信簿

今治市 月 原 宵 明
かけまくも畏こき夫婦すぐ別れ
手鏡へ幸せに満つ顔でなく

補聴器で敬老の日の祝い受け

岐阜市 市 川 鱗 魚

内職に知る千円と言う苦勞
生一本帰省の孫のスト理論

とぎ汁の一とすじ過疎の岩清水

東京都 池 口 吞 歩

チンピラを「犯人A」でのさばらせ
犯人はA、被害者は無視される
マンガ読む犯人Aという子供

今治市 長 野 文 庫

吉報ヘダイヤルの指うろたえる
便利よい電話で自由縛られる
宝くじどころではない土地が売れ

吐血した

高 鷲 亜 鈍

吐血した翌くる日から酒ちびり
潰瘍も癌も五十歩百歩の生命
癌なら癌とはつきり言つて欲しい

○
湯呑は深い茶碗は浅い
銭がないので悪徳重ねられず
丸裸がよい天然の風を満喫
公害にめげず抵抗の四肢でゆけ
夏冬通し水虫と生く六十年
ふり金の股にはめこむ扇風機
ブルースの女と恋を語りたい
晩酌が女房息子へいやみ言う
親父から座を譲るべし若旦那

○
心臓病辛い息子の食支度
女房と息子のヒソヒソ話気がもめる
曖昧な時間を親父執拗に嗅ぎ
公害にどうしようもない生命
ロングヘア昭和天皇永さざる
貧困は暑さに耐える寒さに堪ゆる
生かされて活く身暑さもないものさ
折り合いする身の倅せよ
戦争も平和も地球の上のできごと

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 26 —

三十六年十二月号（不朽洞句帖）

悪質人間粛清せよ

人口論天災だけじゃ減りもせず
用が済んだら殺し屋も消されてた
死刑執行裁判長は飲みに出る
池田池田とショウチウのさかなにし
弁護士も後家の色香にちと動き
汚職とは妻もうすうす知りはじめ
赤線地帯だったところを寒う過ぎ

筋だんねやると漫才師の倅
デザイナーの間違つたのがはやり出し

南海電鉄川柳会「軍内」

一円を見過している車内の眼

三十七年一月号

不朽洞句帖

元旦から心にもない世辞をきき
どっかで三味が鳴る明治生れの僕の新春
火を噴かぬ火山もあるにフルシチョフ
日本人対立ずきな顔をして
倅・速水真珠洞君

追いかけて談すすべなく合掌す

京都支部句会「一人」

お一人ですかと飲み屋のおやじいう

南海電鉄川柳会「合併」

合併をして急行の停まる街

(傍 島 静 馬)

川傍柳 初篇研究

(百二十四)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清博美 丸十府
藤井和雄 岡田甫

722 我々腕をわが手で持てのびをする

一甫 23ウ5

清 背のびの状態を詠んだ句。背のびをするには、両手をはなしたまま上げるか、或いは、主題句のように、わが手で持った形です。「わが手で持って」と表現したところが川柳的。

藤井 書き物でも細工物でもしつづけて、つかれた右腕に左手をさしそえて「アアーアア」とのびをした景、のびの一類型として見て面白い。万才の形が一般型なのに川端ののびの状態描写句。

丸 諸説に尽く。

岡田 同。ちょっと面白いところをつかんでいる。

723 かわいげもなく笑ふのハセ、ら也

龜遊 23ウ6

清 今度は笑い方の説明句。現代でも「せせら笑い」という言葉が使われている。句解の要はあるまい。

高須 「「せせら笑い」とは、他人をバカにして冷笑すること、その憎らしさを可愛気がないと表現した句。説明調なのは、ワザとそうしたものであろう。

丸・岡田 両説に賛。

724 せっきやうの寒声畠中へ出し

龜遊 23ウ7

清 田舎廻りの祭文語りを詠んだ句であろうか。百姓が畠の中に点々としているため寒声を畠中に出すというような形容で、歌祭文を詠わなければならない。

藤井 寒声というから説教祭文語り（かちんのかみシモ腰につけ傘をうちかたげ懐ろにささらのようなるもの見えたるは、疑いもなき説教語りなるも）寒稽古の外で声からしているところだろう。昔から浪曲にしろ歌にしろ寒声とて、寒中に大声で音声

をねった。なお、説教祭文とは歌謡化された説教が山伏の祭文と結びついたもので、近世初頭に流行と広辞苑にある。

川端 礎稿でよいと思うが……。

高須 「出し」の「し」の字、原本不明瞭と岡田先生が注意書きしていられるが、柳雨本は「出る」と書いている。そして「野原へ出て寒声を取る」と説明しているのに三面子先生は「寒肥をきかせた臭あり」と賛成していられる。畠中を「はたけちゅう」と読まず「はたけなか」と読んだのである。

前田 祭文語りが、野良で寒声をとっている景に賛。

丸 藤井説に賛。

岡田 句尾の「し」の字、原本不明瞭だが「る」とは見えぬ。畠中は「はたなか」の方がよろし。文字でハタケヂュウとルビしたのは、約五人の研究家の意見を徹して決めたのだが「ハタナカへ出し」で意が通じよう。説教節の寒げいこを家の中でやられては困る。「畠の中でやれ」と外へ出したと解させる。（ちなみに、例の角力の呼び

出しの小鉄なども、若い時は両国橋の上で
寒声をきたえたという。

725 やれじゃれるなよと秤^{はかり}にかけて居る

眠 狐

清川食物見世の店頭風景であろう。じゃれるのは猫であろう。

藤井^{35ウハ}|| どりよう売りの街頭風景。尚おどりは僧侶が、どりように対する陰語。たことに對する天蓋と同じ。猫が秤にじゃれると見るより、秤の中じゃれていいるおどりと見た。

川端|| 磯橋に賛。魚屋と思う。

高須|| 高尾を身受けするとき、高尾にじゃれるかかすを叱っている句だと柳雨解がある。この方が面白い。

前田|| 柳雨説に賛。狎がじゃれていいる浮世絵があると思う。

丸|| 同。

岡田|| 同。ハカリと古川柳にある場合は、十中八まで高尾身受けの句だ。川柳は十七字だけに、古川柳には作者間のあいだに一種の約束的な慣例があり、ハカリなどもその一例。すぐ高尾を思い浮かべて頂きたし。

726 骨が入るぞへと傘かしてやり

一 甫

清川急な雨降りに貸してやる傘。どうせ使
いみちにはならないほどいたんでいる。開
くにも大へんである。「骨が入るぞへ」は

傘の骨に言い掛けたもの。

藤井||

破れ傘五六本あるずるひ内

傍一・24

で、傘を貸すと貸し手はとかく損をする。
従つて、貸し傘は骨ばかりの破れ傘だ。で
も古骨屋に売ればいくらにでもなるから
返してもらいたいのもケチとはいえない。
そこで破れ傘を貸しながら、使用にたえな
くなくて返してくれと「骨が入るぞへ」と
傘かしてやり」となる。(清説は老婆心、
小生のはしわん棒、どちらとも解せるが、
諸兄、先生の解がたのしみだ)

高須|| 「骨が入るぞへ」というのは「骨が
折れるぞ」ではなく「骨は当方で入用」だ
から、どんなに破れてしまつても「必らず
返してよこせ」で、老婆心でも、シワン棒
でもなく用品尊重精神。呵々

前田|| 高須説の「骨は当方で入用」に賛成
だが、これにシワン棒をプラスしたものに
とりた。勿論、古骨屋に売る計算である
これでも元はいい傘とあしてやり

紙屑の付いた竹屑雨に借り

傍一・26

すごい奴蛇の骨をかす俄雨

傍二・26
二四・31

岡崎|| 前田説賛。古骨買が「古傘大略」四
文、八文、十二文許りに買之」(守貞漫

稿)だったので、古骨買に売ることをふま
えている。

丸|| 「骨が入用」は、こんな骨ばかりの傘
を返す必要もあるまいなどと横着に考へて

いたとしたら、ぐざりと一本止めをさされ
たことになる。その穿ちで、別段欲張りを
云々する必要はあるまい。

岡田|| 古骨買に売る意をふくめての言辭だ
が、もつと軽い冗談口だ。さて前に古骨買
の句が出て来たときに、その古傘の紙は、
ビニール代用に使用されたことを述べた
が、例句を引っぱり出すヒマが無かつた。
その後いくつか見つけたので書いておく。

紅壳傘破れて庵の包紙

七六・20

五段目を蛇の目に包む山おくや
山奥屋は両国にあつた獣肉屋で、肉類も古
傘の油紙で包んだことが分かる。また、大
正三年に大阪から出た「狂言評釈」という
本には、大正初期でも、金魚屋はこの古傘
の紙に金魚を入れて客に渡したことを記し
ている。ビニール代用品に使用されたこと
が分かる。

727 むすめともいわれかゝんともいわれ

長 笑

岡崎|| これもお馴染みの子持ち踊り子。
四五人の親と八見えぬ舞の袖

振袖を着たばつかしで十ヲかくし

初・3
安四・礼2

だから。

高須|| 変に持つて回つた句ばかりの中に、
この句のような平明な平凡な句があるのは
妙な気がする。

丸・岡田磯橋稿賛。

能面の眼

東野 大八

暑さも峠を越した初秋の昼下りのこと。私は美濃焼のさる大手の産地商社の社長室にいた。一見、古武士の風貌をもつ初老の社長が一枚の床置の額皿をとり出して感想を求めた。その極上質の磁器製の皿の表には、模彩式の舞樂の舞人が描かれていた。金、赤、緑、黄、紫のその華かな色どりは、みるからに繊細巧緻を極めていた。

「九谷焼の産地から、年期の入った絵付職人を招いて作らしているんですがね、何分、七十近い老人で、仕事ぶりはさすがですがスローテンポすぎて、一日一枚がやっと伊勢神宮の納品もので数は百二十枚、いつ仕上るのかと実は往生しとるんです」

なるほど、これは一日がかりだわい、と心の中で感じ入りながら、私は黙ってその唐衣に朱の金孔面をつけた踊りの立姿に見入っていた。右手に朱房の剣を握って高くかかげ、左手は人さし指をびんと伸ばした拳の内側を上に向けている。羽根の生えた武人の人面を

飾りにのつけた、猿人ともみまがうその重たげな金と朱の面（おもて）は、人さし指のつきでた遙かの空間を凝視している。らんらんたる金色の中の瞳孔は、ぞっとするほど暗い。だがその大仰で量感溢れた仮面と、ケバ立つ唐衣の胸衣褒のわずかな間から生身の間、肌のぞいていて。あたたかく息づく、その人間生身の色の見事さ。私は、この絵付けをやつてのけた老陶工の、年期を重ねた腕の牙えをまざまざとそこにみる想いがしたのである。

「こんな腕のいい人を百二十枚とはちと酷ですよ」

やおらあって私はいった。社長はうなずき「これを絵付見本に、地場の絵付師にやらせることにしました。ところでこれを描いた老人には、インテリア用の壁掛けの能面を作らせることにしました。私は能の面が好きでして数種のコレクションがあるんです。何か幸いするかわかりませんです」

といって彼は、片隅の戸棚から、古びた桐箱の幾つかをとり出した。

「若いころ、いささか謡曲をかじり、能舞台に関心を持ちまして、いつか手すざびに面をあつめにかかりましたが、大変な大仕事で結局、数面で息が切れました」

そういうながら、フタをはねて一面をとり出した。能面でおなじみの深井である。中年の端正な女の顔を写したその木製の艶の肌は私の手の中で、窓越しの秋の陽をキラリとはじいた。二つ目は赤銅色の鬼面である。ギョロリとした金色の眼がくわっとみひらき、引緊めた口許は力感に溢れ、巨大な鼻が息苦しいばかりに眼に迫る。やがて三つ目が出た。これは死相をはらんだ男の貌だ。薄鼠色のいやな肌艶で、半ば開いた口は、無気味な歯ならびをみせ、伏目の頬は両方ともやけに高く、両頬は削いだように肉がない。眉がなくそれは眼窩の骨の陰で描かれたようなものだ。思わず顔をしかめた私に、

「蛙というのです。凄惨な人生にさいなまされた男の顔です。生きながら死んだ心と、死にながら死に切れぬ魂の論理を遺憾なくたたえた面相です。私の持つものの中で、これが一番好きなのです。これはひとつの私の貌でもあったわけですよ」

私はこの三つの面を、前の空席のソファーのもとに並べてみた。私は三面三様のこのろのドラマを忽ちそこにまざまざと見る想いがした。怨念愁々といううか、哀歎呪祖といううか、一つ一つの面は一種異様の妖気をつ

たえてそこに横たわっている。

「世阿弥や、観阿弥の面などこんでもないので、この一つ一つの面師そのものにも人間の魂がこもっていますね。老境の私は、ことあるごとにこの面をみるのを楽しみにしています。みるたびにこれらの面の語りがみなちがう……」

私はそんな相手の話を耳にしながら、真ん中の鬼面をとりあげ顔にあげる。木の感触が顔一面の肌にくたくたく感じられる。そして二つの光りをまづ孔に、両眼を据えてみた。それはまづ「闇」からはじまった。くらがりの無明のヤミのあとに、はじめて眼が空間を捉えた。面の瞳孔の外界は、それ以前の外界のそれではなかった。外界のなかにおれがいる。その感覚の異様さは、面の中の自分がなぜか寂しい孤独感で襲ってきたからにはかならない。これまた何んとしたこと。

やがて木肌の貌の暗さに、私の体温が忽ちこもりはじめた。吐く息のくぐもりと、わが身の肌のぬくもりのために相違ない。すると突如―死というような予感が烈しく二つの面の瞳孔を通じて外界にひろがるのを覚えた。

面は、人をその人ならぬものに誘ひこむ。

この奇妙不可思議な感覚は、人間を異形の面をつけたことよって生じるのであろうか、それとも面師のノミの一つ一つにこもる気魄がそうさせたのであろうか。私はいつか室内の壁鏡に立って、そこに映じ出されたわが鬼面の貌をみていた。あきらかにそこには、生ける鬼がつつ立っていたのである。能舞台で

活写される地獄の鬼が、私のなかに、私を通して眼のさきにつたっていたのである。

太古のむかしは、面をつけることによって人々は神々に近づいた。荒々しい東北地方の「なまはげ」の異形は、人々をして恐怖に戦慄をさへ与えて、奔放に人間の現世のただ中に君臨する。それは異形な面やその装いによつて、人間への神秘感を誘ひ込むことにははじめていくわけだ。面をつけてたてば人々は立どころに、神々となり地獄の鬼となり、天女にも化する。この境地心証とは果して何か。

歌舞伎の名題「修禪寺物語」に登場する面づくり師夜叉王は、名人気質の職人であった。彼は流寓の將軍頼家から、その顔に似せた面を打つことを頼まれるが、何度彫つても面に死相が現れる。完成しては打ち砕く夜叉王の仕事ぶりに、短気の頼家は怒って、最後の期日をきめねば首はねると脅す。

「その期日は申上げられませぬ。左にのみをもち、右に鎚を打てば面はたやすく成るとはお考えがたい。家をつくり塔を組む番匠とは事変りて、これは生なき木をけずり、男、女、天人、夜叉、羅刹、あらゆる善悪邪正のたましいを打ち込むおもてづくり師、五体にみなぎる精力が両の腕にあつまる時、わがたましいは流るる如く彼に通じ、はじめて面はつくられます。ただしそのときは、一月先か一年先か、われながらわからぬ事」

夜叉王はそう答える。怒った頼家は太刀とりあげて夜叉王の首をはねようとする。それを見て面師の娘の桂が、死相の出た頼家の面

一つがあるのを幸い、それ取出して頼家に渡す。このことから桂は頼家の側女に出る。日ならずして頼家は北条時政に攻められて死ぬのである。桂は父の彫つた頼家の面をつけ身代りの一ときをもつて死ぬ。夜叉王ははじめ、わが彫る面に死相がつねに現れた原因を知り、歓喜するのである。先代左団次一世一代の当り芸となつたことだが、この名作は、ソ連、パリでも上演されて絶賛を浴びたという。原作者は岡本綺堂。明治四十二年伊豆の修禪寺に遊び、同寺の寺宝頼家の面というのをみて、この仮空のオリジナル狂言を思いついたと伝えられている。

三つの能面をやがてもとへ収めながら、私たち二人はこんな歌舞伎の一幕の話にもふれたことだが、私は帰途、繁華街のあるおもちゃの表に、ライオンや、怪獣もののプラスチックの面が軒下にぶら下っているのをみた。

「そうだ、こどもたちにも面があった。百円かそこらのこの他愛もない面を彼等は顔につけることによって、英雄にもなり、怖るべき怪獣のころにもなれるのだ。そのときそのプラスチックの二つの面の穴から、そのこどもたちは、外界の仲間たちに烈しい優越感なり誇りを感じるのだ」

その誇りや力とは一体何か。

川柳家も一度ぐらい、このような面を顔につけて作句してみても必要なのではないのか。



清水白柳書翰集

兄さんと呼んだ 白柳さん

岩本雀踊子

秋の気配も濃くなって肌寒さを感じます。御元気の事と存じます。私もおかげ様で九月一杯は養生いたしました。今月からは無理しない程度で出かけるつもりです。三十日に川柳塔十月号の発送に行きました。小松からヤキモノが届いていたので、雀踊子さんの分大皿一枚を私があずかって持って帰っています。今月十二日の玉造句会へ御出席下さるようでしたら持参いたします。若し御欠席でしたら持つて行きませんから、一寸お知らせ下さいませ。十一月の紅葉の頃に一度四人で寄ります。私は一時間程度ののりものなら医者差支えないと言っています。

(45・10・2)

(編集部註) 四人とは白柳、小松園、満潮諸氏と雀踊子氏

私と白柳さんとの出会いは、白柳さんの弟の友帆君と友達だったことから始まる。私が二十才頃とされている。

兄さんと友帆が呼ぶから白柳さんを私も兄さんと呼ぶのが口ぐせになって、ズットそう呼んで来た。白柳さんが死ぬ少し前、お宅にお邪魔した時「今でも兄さんと呼んでくれるのは雀踊子お前だけや」と喜んでくれた。私の二十才の頃、白柳、小松園さん等十五六人で川柳若葉会をやっていたが、それから川柳国時代を過ぎる頃、私が大阪から故郷の太和へ帰る家庭の都合で川柳から十七年ほど遠ざかっていた。ある日、奈良番傘の歌藤一麦さんから「白柳さんの伝言だとハガキをくれた」「路郎先生の一周忌が茶臼山の慶沢園であるから一度出てこい」との事、川柳から遠ざかっていると言え、路郎先生の御死去も知らず

にいた思かさを霊前にお詫びしたので出席する事にした。

受付に小松園さんがいた。白柳さんとも会った。昔と変らぬ笑顔で固く手を握って「元気か」と兄さんも満潮さんも来ていた。会場でお会いする柳友の皆様は昔の顔なじみ、来てよかったと思った。十七年の川柳の空白から、川柳の世界に呼び戻してくれた白柳さんは、私の川柳の恩人だと思ふ。会ういつも「雀踊子モウ少し句に欲をもてや」と云ってくれた。白柳さんは私からも柳界からも戻ってこぬ人になった。今、若葉会のメンバーで残っているのは、菊沢小松園、岸南柳、魚住満潮、土井浩輔と私とで五名だけになった。白柳さんにもう少し永生きしてほしかったと思っているのは私だけだろうか……。合掌

「猫柳」時代

伊藤 茶 仏

ご依頼の清水白柳の書翰を探がしましたが、便りがくると柳誌の編集用に廻したり、葉書は旅先の絵葉書で、それも、四、五日書斎を探しましたが残念ながら見当たらないので、別稿の猫柳時代のものをお送りさせていただきます。

案道工事 出張日記より

山の 一日

白柳子

ザリリ……五時に掛けてあった目覚しが鳴る。黒谷行の入夫が事務所に寄って鉄物や何

六 方 焼

清水白柳子

かを背負って湿った山道を行く頃から忙しい一日が明ける。

大河原の終点（それは工事中の鉱物運搬用の架空索道の）付近に待っている人夫を連れて河原の丸木橋を二つ三つ渡り、胸を突く急勾配を登って支柱を建てる個所を指図して行く。

事務所で帳簿の整理をしていると、近くのそれも百戸許りの小さい村に過ぎた立派な寺からゴーンと響く、もう十一時だ。

路郎氏の、「だしぬけに鐘が鳴るのも旅の事」の句が、フッと浮んで来る。

ご飯を済すといよいよ現場行きだ。山道へかかると炭や薪を背負うた女が一人、二人挨拶をして通って行く。谷の向ひで山鶯が朗らかに歌っている。

炭焼きの煙が山肌から薄くうすくのぼって行く、夕方から風が出て彼岸の入りだと言うのに冬オーバーを着てガタガタふるへる位いの寒さだ、事務所へ帰りつくともう六時過ぎだ。

夕飯をすました頃から、ますます風が荒れて停電だ。電話をかけるにも峠を一つ越さねばならぬから仕方なしに蠟燭で辛抱する。

日車氏の

「灯のゆるるが風の姿なり」の句を眼前に見つめてバットに火を点ける。これからが与えられた句想を練る時間だ。

「ねえ柳」の人々の面影を思い浮かべて、瀬の音を枕近く明日への夢路をたどってゆきます。（昭和六年六月号猫柳誌掲載）

九月号（昭和二十四年）の川柳雑誌で句の風格のことについて路郎先生が講ぜられているが、句を生み出す作家の型を考えてみるのも面白いと思う。

故六厘坊や青明は天才型であり、五葉は町家型だとすると、かはるは女形型といえるかも知れない。現代の川柳家の中にはボス型と、それを取巻く封筒型（編集部註・肩問のことか）が多いように思われるのは残念なことである。

ボス型は句はあまり上手ではないが、いわゆる顔で柳誌にのさばり、何かことがあると真先きに飛び出す連中である。それを取巻いて句などはどうでもいい、一ぱいのめればそれでよいのだと騒ぐ人達を封筒型という。また金の出そうな人たちをかつきあげて柳誌でも発行したりしようとする連中もこの型の中に入るかも知れぬ。

主義主張もなくあらゆる選者に句を出すといったような型の人、これをこうもり型の部類に入れるべきだろう。

真面目に川柳のことを考えているのだが、自分の主張に急であって他を容れる器のない人は赤旗型であり、交流に力を入れすぎて、することがどつちつかずになったら、これはぬえ型。実は自分のことをいいたかったのだが、よく人にあんなは川柳、川柳といったものが気楽ですなといわれることがある。

そんな時はきまって私は、私が川柳をやっているか、いまごろは気でも狂っているか、それとも一家心中をしているだろうと思うと答える。

そうして御承知のように、私は一人のかせぎで子供六人と家内と母と、それに弟（とも坊）の遺児とを養っているのだから、生活費だけを考えても大変なもので、それに学校に通っているのが四人、それが持つて行く金だけでも、またその上に税金。毎日の金のことばかり思っているから、それこそ明日のことどころか、きょうの生活がどうにもならない。

そんな状態で川柳をやっているおかげで、ものをみるのに余裕があり、心にゆとりというものがある。決して現実からの逃避ではない。川柳によって世間を考え、川柳によって世の中をみることによって、貧しい生活の中にも温かいいうおいを持つことができるから生きておられるので、決して遊びや道楽で川柳をつくっているのではないと答えている。こんなのは何型に入れたらよいか、さしづめ貧鈍型とでもしておく。（昭和二十四年十月の投稿で猫柳一二月号に発表したものです）

旅 信

西 出 一 栄

いずれも絵葉書でいただいています。旅先きからはきつと絵葉書でお便りを下さいました。

用件のお手紙は長くなりますので、この二

通を選びました。

★

十四日博多へ来て雨の福岡をうろつきました。十六日は大宰府に筑後柳川へ北原白秋の碑を見に行きました。

十七日は諫早川柳会を訪ね、今日は阿蘇に登って静かな温泉に來ています。明日は熊本を訪ねます。

十八日 阿蘇にて 白柳

西出一栄様 (消印四四、四、十九日)

★

たまつくり句会はだんだんにぎやかになってたのしいことです。

今日墓参をすませて息抜きに來ています。川柳のない旅も楽です。

十五日

父の日を丘のつづいた旅に居る 白柳

和倉にて

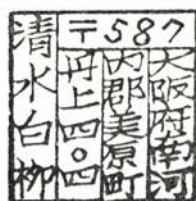
白柳

西出一栄様 (消印四四、六、十六日)

葉書にギッシリ

藤岡花梢

句会の帰りに わざわざ遠まわりしてまで送って頂いてありがとうございます。おかげ様で楽にやむことが出来て喜んで居ります。尚御心のこもった着物ありがとうございます。肌にさわやかな感じをたのしんで居ります。御厚意を深く感謝いたして居ります。重ね重ねありがとうございます。岡山の件、お供出来なくてすみません。先方へも行けない



ことを知らせました。

ひるは暑いですが朝夕は大分楽です。毎日ゴロゴロしているのが大変です。でもあきらめています。コノ判コ(カット)は松山の森紫苑さんが彫って送ってくれたものです。喜んで使っています。(45・9・8の消印)

★

電話でお願いしました柳太さんに十一月七日の句会での柳話のことよろしく。

曲線の句、どれを選者吟に使うかはわかりませんが左のようなのを作りました。

―電柱を半分照らし切るカーブ―
―人生のカーブ別れた人と逢い―
―ひかりこだま疾るカーブにある魅力―
―弓の曲線その瞬間にある力―

昔の句は
―タクシンのカーブは画にも詩にもなる―
―薫風さんの入院で川柳塔系の柳人佳句百句を東京へ送るのを依頼されました。シンディ仕事です。また小雨がしとしと降ってきました。(1970年・万博の記念切手使用―十一日夜)

毎月数回の絵葉書

堀江正朗

緑之助先生還暦大会(42・10・15)ご出席十五日の大会で芳子さんにお目にかかれて、肉親以上の親しみがこみあげて泣かれました。川柳による心のつながりを深く感じさせられます。句を通じていろいろの事が作者と選者という立場が違っていても川柳を愛するのはいっです。心を通い合うのだと思います。いつまでもお元気です。十六日は布堂さんへ路郎賞をお渡しして帰りました。(略) 18日付(43・3・21白柳居にて)

六十三回目の誕生日なので落ちついて家におります。正朗さんによろしく。同封の切手珍らしいものではありませんが、息子さんにあげて下さい。(二男にいつも送って頂く)

(44・6・12正朗左眼摘出。日赤宛に) 大変だったろうと思います。(略路郎忌に上阪されることですが大丈夫ですか。くれぐれも無理をしないように。私はおかげ様で至極丈夫に出来ているらしく一日は岡山へ八日は箕面へ吟行に、十五日は能登へ行くつもりです。能登は川柳をはなれた旅です。

(45・4・12むらも観桜句会ご出席)

桜まつりの句会へ参りましてお顔を久しぶりに見て本当に来てよかったと思いました。静かな清風荘も思い出にのこります。(略) また来年も行きたいナと考えています。(略) (45・7・7日付。路郎忌に出席した折)

路郎忌には続いての御出席御礼申上げます。狭い汚いところへ来て頂いて驚かれたことと思います。しかしあれが本当の姿だとわかってもらえたら結構です。あの日から肩が楽になり喜んでいきます。とりあえずお礼まで。(お疲れのご様子で全身を治療させて頂いた)(45・8・25ご退院の吉報を拝受)お見舞ありがとう。八月八日夕方方筋コソクで入院しましたが命だけは無事で二十三日に退院して静養してしますので安心下さい。羨望を背に退院の階降りる 白柳

最後のハガキ

山内 静水

山口県からのお便り拝受、ありがとうございました。作句教室同封の「たけはら」三日に拝受いたしました。世面多留大会にご出席の由にて、張り切りぶりが目に浮かんで参ります。当日十一月一日は堺川柳会の吟行があり、それに参加して昼食の時に世面多留のことを思い出し、祝電を忘れたと膝を叩いたことがアトの祭り、誌上大会の選をしているのに申し訳ないことをしました。

仙崎からのエハガキも続いて頂きました。英詩さんと連れ立っての旅は楽しいことでしょう。萩の大会も盛会だったことと思います。「川柳人」の剣師生誕百年記念誌上大会には参加しましたが、萩の方はごぶさたしています。秋の陽差しに日々元気をとりもどしていますので放念下さいませ 白柳

(消印は大阪黒山45・11・7) 山内静水あて
★ 先生に作句教室を担当して載いたのは、昭和三十八年二月からでした。四十五年八月八日突如心臓発作でご入院、その間二回休まれただけで、実に七年八カ月。時には旅先から電報で、また速達等での送稿は身に余るものがありました。ついにお心に添えぬまま、四十五年十一月で休校になってしまいました。本社よりこのたび原稿依頼を受けまして、文箱を開けてみた時、あれ程に筆まめでいらっしやった先生の書翰は二十数通しか保管していません。次第です。

最後の御葉書

八木 千代

秋の空と何とかは変わり易いと言いますが、今日は朝から何回も小雨がパラツイて、本当の秋空です。昨日は暑い一日でした。日曜なので大勢の人通りを抜けて、岸和田城の前の文化会館で、市民川柳大会がありましたので出席しました。そして四十分程、川柳の初心者への助言という題で話をしました。

今朝からその話を原稿にしてほしいと言う声があったので二三日中に書いて送るつもりです。今夜は「駒つなぎ川柳会」の例会で、明夜は「どんぐり川柳会」の例会とつづきます。二十八日はまた和歌山へ出かけることになって居ります。

一度顔を出すすと断れない会ばかりなので、出来るだけ出ないようにしていますがまた元の忙しさに戻りそうに弱っています。体は大丈夫と思っていますので御安心下さいませ。四六・一〇・？(私宅には一〇月二六日に到着)

四十三年二月五日

城崎にて

但馬の出石に用があつて来たのでつい雪をたのしみにして足をのばしました。

窓ごしの雪みるだけで外へ出ず 白柳

四十三年四月十六日

旅のたのしさというものは、家に帰ってホッと落ついてから、しみじみ味わうものだといえるようです。東京から伊豆、そして高山、北陸と良い処を廻られていい思い出が出来て羨しいことです。

昨十四日は高山祭りの筈です。二十年程前に高山線廻りで北陸へ行った時のことを思い出してなつかしんでいます。金沢は私の故郷から九里北ですから子供の時分から良く行きました。川柳大会へ始めて出席したのも金沢川柳大会で、大正十三年ですから昔語りです。いい旅の句をボツボツと見せて下さい。

ふるさとを語る大工は腰を据え 白柳

▼白柳さんが亡くなられて早や三年になるのですね。惜しい人でした。

一冊つぶす気なら、もっと多くの方々に執筆ねがえたのですが、この点ご諒察のほどを――。

(編集部)



北川春巢選

八戸市 安田勝己

徳用米おいしくさせる初サンマ
大安吉日ご予算に押し出され
美術展出れば灰色のレアリズム
思い出に仏がてれる通夜の酒
逸話なき人生の幕愚痴で降り

三重県 川上富子

大胆なポーズ だあれも居ないから
花言葉今日は少女になるわたし
赤とんぼ我が家を偵察して帰り
あと押しのない人生をまるく住み
手伝いに行ったお通夜で泣き明かし

東京都 山根白星

天元に置かれたような戸惑いだ
マンションの下見に親子ほど違い
心根はかくもダンプのマスコット
機関手になりそになった詩人です
黄昏の墓で現在、過去、未来

大阪市 小谷葉子

秒針を止めて幻の逢瀬かな
僅な空白に善意つめておく
バルコニーで溜めるロマンの小さくて
二人なら渡れる吊橋わたらねば
いつも種まく女でふやけてる

鳥取市 両川洋々

うっかりと酔うて本心聞きそびれ
硫黄島の草は遺骨を抱いて伸び
金に目がくらんで先祖の土地を売り
土地売れた騒ぎが先祖の勘に触れ

米子市 増田竹馬

赤トンボ飛んで訝かる世とはなり
自惚をくすぐって売るセールスマン
娘が嫁き梨の宛先また殖える
おふくろの味胃袋の記憶力

縄のれん喜怒哀楽の肩叩き
今治市 渡辺伊津志

間の抜けた妻悪友に人氣あり
バーゲンのうまさ心の隙をつき
商売のコツ役人の意表つき

東京都 宮崎 美津子

旧盆に里帰り

胃の調子ととのえておく里帰り
その奥の奥で応答あり生家
早魃に老母執念の茄子の色
過疎にいま満ちてくる潮旧の盆

尼崎市 中谷 利美

罪のない子供に離婚後遺症
やけ酒の隣り景気のいい話
好き放題言うて飲むからうまい酒
味な石打ったつもりが手を抜かれ

岡山県 谷川 渥子

若さ暴走レールのヒビに気がつかず
週休二日妻の休める日とならず
一言ですむやさしさが言えぬ夜
毛糸編むリズムに秋が深くなる

大阪市 堀口 欣一

あんころとうどんで昼にする課長
同病のここでも智恵を授けられ
連吟に老若交るおめでたさ
仕事師と呼ばれ社長のゴルフ帽

東大阪市 落合 思月

やり直し効かぬ余生へ灸をすえ
蒼い空井戸の水を飲んでます
母一人娘一人心に鍵をかけ
里帰りする娘へ母の花ばさみ

和歌山市 樫村 ふみよ

婚約の知らせはのぼのぼの受話器置く
孫の手で関白の座がゆすぶられ
如露を手に花に聞かせるひとりごと
本籍を名乗りおさかな店に出る

守口市 野呂 右近

見合する娘に母の知恵姉の知恵
三者から見れば許してよい二人
山門へ車背を向け瓦斯を吐き
値上げ批判して新聞も高くなり

大阪市 平井 露芳

会社ではおっさん家ではおじいちゃん
戦車と呼ばせて憲法踏みじり
公害にかかる間もなく蟬は逝き
水キキ大海の水笑ってる

大阪市 神夏磯 道子

娘が洗う鍋の音にも若さあり
手内職肩こりはぐす小さな手
マイホーム柱さわれれば血が出そう
楽しみへ今日も見ているカレンダー

岡山市 花田 たけ志

断絶を防ぐ電話へ妻も出し

老妻のひとり長らう日を案じ

香水は夜の焰をあふる風

足らぬ視野くびで補う日本髪

神戸市 佐々木 静 泉

妻がいて子もいてちよっぴり物足らぬ

挨拶は物価が高いから弾み

汚染魚ではないよときれいな目で並び

四国けち旅行

有料の値うちは観たあとで決まり

和歌山県 ふきあげ 虎 城

合せ鏡一本にツバつけて済み

震度3程度にゆれてゐる妬心

ふくよかさ失い寡婦の道けわし

割り込んで来たので割カンにも加え

大洲市 堀 内 暁 風

福の神貧乏神に追い出され

軽蔑をした守銭奴へ頼む破目

米寿から見た還暦の若いこと

和歌山市 秋 月 宏 方

ピアノ鳴る不渡り出したとかいうが

カラフルな柄にマネキンまた着替え

わが辞書にもう風化した恋の文字

守口市 岸 本 豊 平 次

網棚が先ず音を上げる盆列車

表札は俺だが鍵は妻が持ち

壊れてみればテレビも必需品

大阪市 阪 上 十 止 庵

白を白といい切る人を羨やみぬ

カメラアングル芸術的でもない顔に

白壁の白さを憎むほど汚れ

竹原市 三 宅 不 朽

野仏の挽歌朱となる曼珠沙華

障子張りに来たよと独りに触れぬ母

ベレー帽その才能は口にせず

島根県 堀 江 芳 子

拗ねている六十路おかしさとおりこし

旅ひとつひとつ絵葉書から貰い

飲んで来て寝るとも知らず台所

松山市 谷 の ぶ お

にやにやとしたのが無口の好意なり

これ以上爪立ち出来ぬ高い靴

鼻唄の歌にならないさびしさや

青森県 荒 田 つ る

何をどう着ても若さが美しい

成功がはなればなれの心にし

我こそと自信がついて人を誉め

鳥取県 福 田 保 子

スタミナをつけて真夏の夜を稼ぎ

インタビュー離婚の過去をききたがり

和解する氣へ名産の梨が着き

岡山県 福原辰江

娘が就職台所の歌声持ってゆき

子の古着夫婦揃って鍬をふる

魚にも戸籍謄本ほしくなり

松原市 守屋万竿

寂としてカンナも燃えず乾ききり

明日も晴ですとアナ詫びるよう

拝啓のあとにひでりの愚痴つづき

鳥取県 大坪天涯

過去の夢たぐる写真の色が褪せ

土壇場のファイト小粒の意地を見せ

広がってゆく空想を蚊に断たれ

寝屋川市 福富隆子

値引きしたダイヤの高も知っている

内職の切れ目を夫がアルバイト

愛情のうすれ盆栽枯れている

寝屋川市 江口度

御得意の葬儀へ業者の点かせぎ

レイキュー車のろろ炎天のガマン会

スダレあげ庭とりいれる灯をともし

竹原市 古江雅鳳

野仏に道を訪ねて一人旅

慰める言葉もなくてついて泣き

地下足袋の匂いに耐える職がある

大和郡山市 森田 カズエ

悪友にされて信頼うらぎれず

児心音助産婦さんヘリズミカル

御香奠書くとき揺がす硯箱

弘前市 小山内 貞男

父の日にポストからつくビール券

木蓮の香りに堪える寡婦の夜

なめらかな京都言葉にしてやられ

岡山県 永宗 宗義

まわらない首を実家に持ち帰り

外孫が来て盆栽の水が切れ

停電もよし二人だけで居る

大阪市 内藤 ますえ

きょうからはうちの娘でない高砂や

われない食器で食べるまづい飯

概算で言うても足りぬのは足りず

大阪市 木村 濁水

音頭取り美人のせいで輪がふくれ

にわか雨ゆっくり急ぐお年寄り

風鈴にオンザロックも上きげん

西宮市 両川 康博

マネキンが着るから似合う娘の見立て

生き甲斐を子に引き継いで急に老け

良い人と解かり経歴読み直し

備前市 武内 雅堂

遠い日へ父のレールが敷いてある
紅つけてビルの掃除婦若返り

鳥取市

大塚豊生

作文を読んで見直す子の願い
断絶を知らず子宝みな巢立ち

仙台市

川村映輝

道端に供養塔ふえる地獄図絵
へそ出して人気挽回するつもり

尼崎市

小林文月

敬老日遠い所に娘らが住み
敬老日若者たちに利用され

和歌山市

吉野富子

退屈な話あせもがかゆくなり
若者の休日となる敬老日

橿原市

西本保夫

平社員の宿命ガクが無い為に
悪者に成るのも馴れてる平社員

高槻市

山田スミ子

ワンマンカー停車ボタンで故郷へ着き
麦茶のんで変る故郷をなつかしみ

新潟県

市川一峯

白寿とは上には上のあるものよ
帰省子は金の替りに自家用車

河内長野市

井上喜醉

喉までは出かけた反骨よう云わず

下ッ端の責任頭下げて済み

島根県

安達潮音

縫い終えた妻客の座に盆点前
金婚までがんばらなくちゃという酷暑

大阪市

横地正彰

みな老化ギャンブル追う気だけ老いず
極道の重みを老後に背負わされ

岸和田市

池田香珠夫

ジーパンにヒップ無理矢理押しこまれ
タイミングよろしく昼寝起きてくる

青森県

岩淵一星

百姓を継ぐ自家用車海が好き
時間表とデイトの時間だけまもり

豊橋市

鎮浪翠月

飲めば出る唄も音痴で子が笑う
口だけが達者で役につかされる

大阪市

松本市郎

孫とねる満ちたりた夜の短かすぎ
我が子ならここは怒ると孫を見る

宿毛市

山本窓花

ナツメロの娘時代をたぐり寄せ
おしめカバー病人用は悲しませ

今治市

古野伶人

バラエティーに富んだ後妻の物語り
世界的不足を休耕さす政治

鳥取市	有	田	鹿の子	やりとない見合へ母は粧わず おみやげを渡しそびれて食べている	堺市	栗	本	藤	持
名産が母の元気な文字で着き しじみ汁吸う故郷の空青い	大	林	曲ん手	超ミニと高靴が行く平和な世 平和にも酔い革命が欲しくなり	守口市	樋	口	一	峯
名古屋市	大	林	曲ん手	これからの相撲へ漫画戻つて来 欲張つて遊ぶ間の無いスケジュール	新潟県	高	野	不	二
お互に病めば死なせぬ手の温み 換えて置く名儀に妻が淋しがり	羽咋市	三	宅	思い切つて行けば税務署低姿勢 コンピュータドック承認まだ飲める	八尾市	内	海	幸	生
コンパインの音きき明治は鎌で刈り 芙蓉咲く庭へ天龍の石を買い	島根県	谷	岡	思い切つて行けば税務署低姿勢 コンピュータドック承認まだ飲める	八尾市	内	海	幸	生
言い足りぬ舌が引きつる秋の空 遠き日の山は木槐の唄と生き	和歌山市	仲	原	同窓会悪童のまま老けた顔 母のため使つたお金を母叱る	倉敷市	津	田	耕	水
血圧で駄目とは惜しいナポレオン 美しく老いて悔なき母と住む	大阪市	新	川	長生きをせよと年金粥する 目は蠅(ハイ)を離さず握る蠅叩き	羽曳野市	麻	野	幽	玄
仕事は繰り延べ給与は逆のぼる公僕 八重垣を裏からも見る雲州路	岩国市	村	井	扇風機一人の城に寛がん 糖降りている盃は満ちたまま	貝塚市	行	天	千	代
倦怠が待つてる主婦になりたがり 野暮用と知つてもはむ旅仕度	青森県	波	ただお	死ぬのまでうっかり死ねない物価高 知らぬ人に一円貰つたレジーの列	厚木市	高	野	芸	太郎
黙々と囁む音だけの老夫婦 古里の砂丘ダンブに持つてかれ	茨木市	日	高	防犯ベル女一人の城まもる	厚木市	高	野	芸	太郎

江戸っ子だ神田のどまん中に本籍がある

大阪府 鈴木 生 仏

一人者味見で残さずたいらげる
妻の顔、昔のえくぼ、今はしわ

大阪府 浜 西 駒 子

涼風は心の中をひきしめる

秋風に遠いふるさと稲香り

松江市 西 田 溥 子

おしめが泣いてるのに特価品あさる

山の夜の疑惑は雷雨というパターン

大阪府 大 国 たちし

汗かきの娘を庇う見合の場

鳥取県 林 露 杖

長生きをしそうで困った気にもなり

鳥根県 岩 田 三 和

アドバイス押してだめなら引いてみる

今治市 原 田 輝 親

登山者に見られて弾む夏スキー

松江市 岡 崎 雪 美

菊の苗やっと大輪咲くかまえ

和歌山市 岡 田 ひさ子

新婚の指輪に幸せ満ちあふれ

鳥取県 安 履 翁 陽 山

漬物の味のポイント母性愛

豊中市 安 藤 寿美子

節水中だよと植木にいいきかせ

新見市 吉 田 落 猿

労働に報われないで負う赤字

新潟県 栗 和田 清 子

帰省客どっと帰って過疎わびし

和歌山市 津 田 与 史

寿命伸びるニュースはニュースと聞き況し

須賀川市 平 栗 金 太郎

祭り酒機械化の農家多く買い

青森県 田 沢 つとむ

過疎村は東京音頭で盆踊り

泉佐野市 大 工 静 子

有難く思う余りし我が命

大阪府 吉 野 志 津

歩道橋向う三軒名は知らず

大阪府 村 島 秀 村

蟬の声何が恋しくて泣くのやら

大阪府 広 畑 賛 平

紅葉狩り窯あり即吟楽焼し

大阪府 須 浦 つ ね

夫逝き時計のゼンマイ忘れがち

大阪市 花 田 繁 子

物価高さわけばさわぐ程上がり

松山市 豊 島 フ ク

サーカスが寝てるテントへ虫ちろろ



生活の詩！
そこに川柳がある

川柳のあるところ
あなたがいる

執筆

黒川 紫香
大本 鶴喜 由香
越智 柳志
小浜 牧水
小出 智人
河野 君子

女子寮々長 黒川 紫香

捨て犬を抱く娘逃げる娘寮の朝
寮の昼同じ時間に雀が来
冬眠を起した蛙埋めてやり
女子寮の夜中洗濯機が廻り
寮一人戻らぬ夜の日記書く

最終の巡回で廊下を歩いていると「寮長さん」と何処かの部屋から声が飛ぶ。また病気でしまったのかと案じながらその部屋をのぞきこむと、二、三人机を囲んで話をしている。

「お茶でもどう」と誘われるまま部屋に入ると、自分でつくったと云うあやしげな菓子に紅茶を添え、郷里から届いた梨をむいて出してくれた。あちこちの部屋からステレオの音が流れる。そんなふんい気も女子寮の姿である。

電鉄、ホテルと約五十年、その殆んどを資材畑で過し、もう白髪が多くなった私は五年前から女子寮の管理を委された。

北摂池田、五月山の緑、そして時たま訪れる山鳩、セキレイ等の小鳥、二百人ばかりの若い娘達に囲まれ倅わせな日々でもある。



はたらくうた

薬剤師 大鶴喜由

見ていれば大方水の水薬
衝動買ひする気にさせる薬剤師
先生とか大将とか云われ薬剤師
店構え程に薬局儲けてず
本質的な分業を願う薬剤師

① 薬局を見ていると、ちよびつとの薬を
たくさんので薄めている。薬九層倍の匂い
がする。

② 総合ビタミン剤、高蛋白低カロリー剤
婦人薬など、聞けば聞く程、購買心をそそる。

③ おだてられていているのか、信じられてい
るのか、さっぱり判らない。

④ 薬事法により坪数の規制や採光、通風、
冷暗、清潔、陳列の区分等で構えが大きい。

⑤ 医薬分業は名のみで、一向に処方箋が
回って来ない。調剤で食えるのは何時の日か。

セールス 本多柳志

聞いてほしい言葉を探す栓をぬき
黙々とノルマへ挑む靴が減り
初心まだ忘れておらぬ提げ鞆
買わぬ気を買う気にさせる無駄話
四捨五入自分に甘い考料表

旧制高工電気科卒直ちに満鉄技研入社、満
洲事変に遭遇。この頃松村巨湫に依って俳句
開眼。昭和十二年支那事変には軍属として北
中支方面に転戦被占領地工業施設接収に従事
して叙勲。

十四年東京支社に転じ二十年終戦。大満鉄
も瓦解素浪人となる。これより先朝日主筆永
井瓢斎氏の提唱する「下手よ集まれ」集団に
参加して俳句生活。二十五年大阪某造船所勤
務中に所謂造船疑獄に連座再び「吹けばとぶ
紙一枚で首がとび」つくづく宮仕えの悲哀を
痛感。第三の人生をセールスに賭ける。二十
七年奇縁（このことには一文有）にて川柳入
門、路郎門下に馳せ参じ、いのちある句を求
めて川柳行脚中。



集 人 特 人

国家公務員 越 智 一 水

開局百年あゝ夏草が眼にしみる
宿直のひとりへ月がきれい過ぎ
元日も働く僕にある誇り
不規則の務めで愛がよけい燃え
定年が迫る夜 妻も醒めていた

今であれば、電々公社さまさまの職員であるが、その当時、すでに僕は郵政事業の仕事をしていた。

週休二日制が、どこの企業にも実現しようとしていた今日、どういう因果か、僕は益も正月もない労働で、来年四月、三十年勤続表彰をうけることになっている。

ふり返えてみれば、事故と言う事故も起したことはない。かげ、ひなたなく働き、上司にお上手一つ言ったこともない。

うだつの上らぬ僕は、もちろん出世欲もない。ただ郵政労働者として、誠実に元気で務めていることのみ自慢し誇りとしている。

宝石商 小 浜 牧 人

フルベイス売り子は背を向けたまま
たよりない英語で真珠並べとき
宝石を選ぶ目も肥えて二号さん
一カラットの石で男を信じきり
一と休み一と休みして片肺の

会社勤めの頃は齢も若かったので仕事やスポーツ、遊びにも随分無茶をしたものである。振り返るとその一つ一つに楽しい思い出が残っている。特に終戦後あの荒廢の甲子園球場の整備に苦労して復活の全国中等学校野球大会が行われた時の感激は今に忘れられない。「甲子園歴史のつづく旗が立ち」その時の喜びである。その後積年の無理から長い療養生活を送り肋骨数本を切除して半人前の体となって社会復帰、或るホテルのロビーで真珠宝石を扱う業に変身した。宝石は近付けば近付く程その魔性に魅入られ石の虜となるものであると思う。ホテルと云う特殊な環境の中で内外の所謂有名人と云われる人達のプライベートの一端、宝石を通じて触れる機会が多々考えさせられることが多かった。現在はそんな仕事を離れて久しい。



はたらくうた

主婦 小出 智子

意地を追う夫の靴を光らせる
手を入れてしまえば糠味噌も親し
鍋を磨いてささやかな誇りとし
しきたりに古い女でよいとする
坂道に来て自転車の子に越され

思いもかけぬ病気で手術をしてからまる二年、すっかり健康になったとは言えないが、意識して明かるく元気な主婦でなくてはと心掛けるようにしています。

小学五年生の末っ子に、「交通道徳を知らん」と叱られたり励まされたりしながら、サイクリングやハイキングに行つて健康に氣を使っているこの頃です。

サラリーマンの主婦として、どうしようもない近頃の物価高、少しでも安い物を買うようにと自転車で走り廻り近所の分まで引受けて買つて来る世話焼きでもあります。安くて美味しい夕食が出来た時、主婦としてささやかな幸せを感じるのです。

主婦 河野 君子

無駄に刻流して時計の位置確か
こんな時救われる夫の無関心
秋風が心に染まぬ針持たせ
一目ごと安らぎを編む妻の幸
何時か来た道何時かのように自信湧く

「文鳥と遊んでいると母さんは上機嫌だね」「母さんは毎日呼吸しているだけだね」と、まるで人間失格のようにからかう主人や息子がその口で、「母さん、お母さん」と、安呼びわり、ずい分割の悪い役だと思ふ。

地の利がよいのか遠来の客も多い。そんな中で、こせつくのが嫌いな性分は、何時も、ケセラセラ、何事もぶっつけ本番という気楽さです。台所は火の車でも、小さな城の中で、悠々自適を決め込むお目出度さは、拭いようもないようだ。

自負出来ることといえば、こんな私が、明治氣質をどう狂わしたのか、米寿になる姑に一番頼られている嫁であること、私以外の存在はないかのように――。

親切心

橘 高 薫 風

清水白柳さんから私への最後のハガキには、四十五年十月十四日附、十五日の大阪黒山局の消印がある。宛先きは大阪市福島区上福島南三ノ七二大阪厚生年金病院三三一号室である。

切手は日本万国博覧会記念に発行された秋田の芋灯のもので、その赤い地色と白柳さんの住所雅号印の黒とが仲々良く釣り合っている。コットン質にセピアの細い卦、細かい銀箔を散らした私製ハガキで故人の渋い好みがかがえる。文面は、

「お元氣のようでは何よりです。川維系名句集の件承知いたしました。かはる、岬楽、雅幽、丹路、愚陀など名作家の句を改めて読み返すのは勉強にもなり、ありがたいことです。昨日から宇部の世面多留川柳社の誌上大会の選句をしています。これがすむと時の川柳の課題吟の選で、もう句稿がついていて忙しいことです。十月号平安に初心者向けのものを一寸書きましたが、いつものむし返して気がひけますが、読んだ人から反響があつて満更でもない氣になっています。今日はこれから和歌山へ出かけます。和歌山も俳句と川柳が別の会を持つようになるのではないかと思っています。その話合いに行くのです。川柳の会はもう発足しているのですから安心して

す。

お大事にして下さい」

というものである。川維系名句集は、名句抄というべきで、当時、石丸弥平氏が、川柳漫画の「こだや人生」を出版なさるのに、適当な資料を送つてくれと私に依頼され、承諾したもの、私は入院手術ということになってしまつて、抄出不可能となり、白柳さんに代行して貰つたのである。せいぜい五十句から百句ぐらいを、さつと抄出して送れば良いとも思える作業を、白柳さんは、もう一度、川維系の古い作家を見直そうと云つておられる。しかもハガキにもある通り、又、日曜毎に文化祭のある秋の目まぐるしい時期にある。私はこの便りに接して、悪いことをした、と直感したものだ。白柳さんが、各地の柳人に人氣のあつたのは、この誠實さによるものと思われる。それ故、白柳さんへの手向けに、
菊の香や親切心は引継がんと詠んだのであつたが、私の誠実など、白柳さんとは較ぶべくもなく、故人も蓮の台で、苦笑なさつてゐることであらう。

白柳さんの

爆弾ハガキ

不二田 一三夫

もともととぼくは人様からの郵便物

は返事を出すといふ一月後に処分することになっている。(こんなことを書くともうどなたからも見捨てられてしまふかも知れないが、交友関係が広すぎて保存法がないのである) そんなばかりが後生大事に残しておいた白柳さんのハガキがある。消印は39・1・16。全文を発表したいのだが、あのおとなしい白柳さんにしてはあまりにも激烈な文章なので発表しにくいのだ。(このころは柳界から引退していた)

川維もこれでつぶれるかも知れないと、小松園氏とも話していたのです。

と、結果的には「川柳雑誌社を愛するのあまり」からではあるが、川維史にこの一頁は欠くことのできない大事件があつたのである。本誌はその翌年10月に誕生したのである。

松坂屋の商品券

ご利用がさらに便利になりました
大丸各店にも共通

松坂屋—(名古屋・上野・銀座・静岡・大阪・岡崎・
東京大手町ビル売店・横浜野沢屋)

大丸—(大阪・東京・京都・神戸・町田・八王子)

和歌山大丸博多大丸・下関大丸

高知大丸・鳥取大丸別子大丸

500円券から30000円券
まで8種類



大阪天満橋

松坂屋

電 (06) 943-1111

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

世の中のいのちを母に蒐めたし

垂井葵 水

母堂を亡くされた句、いくつになっても親との別離は想像するだけでも悲しい。併し余りにも感情の激しいものは句になり難いといわれているがさすがに巧手よく纏められた。波がしらひとつひとつが月を抱く

正本水 客

旅行吟や名所吟はなかなか当人の感じる程、人を動かす句にはなり難い。それは当事者と第三者との距離の問題であるからであるが、此の人独特の句の構成で、他の追隨を許さない。

落ち甲斐のない異だから避けてゆき

横田英 詩

川柳人らしい皮肉な観察、平凡な眼なら見過して終いそうな境地をよく捕えている。齡に似合わず老巧の眼だ。

バケツリレー夫婦相和すことになり

三井 醉夢

今夏の水飢饉は記録的なもの。香川県も御多分に洩れずニュース面に幾度か報道されていた。併しこの句にそんな暗さは微塵もない。むしろ、それを楽んでいるかの夫婦の笑顔さえも想像されて楽しい。川柳人の余裕というべきか。

耳を閉させ風は言葉をつくるから

関美子

この人の句にはいつも心引かれる。この句にしても風が言葉をつくるとは実に言い得て妙、凡手のなかなか思い及ばぬところ、感覚を頂く。

空いている方の寿司屋を通り越す

大坂形 水

都会人の感覚、こういうことに良く出会って居ながら句にならない。老練よく纏められた。

ステコで我れ天皇を羨まず

工藤 甲吉

下五の痛快さに息をのんだ。この作者の古い時代から妙に心引かれる達者な人だ。毎々何等かの意味で川柳のよさを教えて呉れている。先達の一人だ。

喉の皺見えてネクタイ締めなおし

石倉 旅風

齡が行くという淋しさは当人で無ければ判らない。なまじ同情されると余計に淋しい。具象化すると斯んな句になるのだらう。真正面に対決するにしても余裕がある処が川柳人のせめてもの特権かも知れない。

コバルト照射まだ廃車とはさせぬ身の

八木 千代

佳人多事、水々しいこの人にしてこの句の深刻さに心が暗い。次の句に明るさを感じやや救われるものがある。いつまでも健やかな乳房でありますように。

蠅叩きごときに無念とほっかぶり

仲 どんたく

古いこの人の健在を喜ぶ。川柳の風流の根元である人間味も、終にごきぶりにまで及ぶか、雑兵に刺された武将にも似て面白い。

檜山へ背負うて呉れる子もおらず

藤井 春日

新しい時代の感覚を詠い上げている。親子の断絶の深刻さが檜山までの関心さも示さない。疎外さが絶望に近い強さで迫っている。考えさせる問題をずばり遠慮のないタッチで逐うている。

以上の他、紙面の都合で割愛した佳句。

寝に帰るだけの家賃がまた上り
うさ晴すビールも同じ溢れよう
だまされた日の合鍵は温かった
合鍵は打っても意見は別に持ち

河股緑水
宮川珠笑
江城修史
川上大輪

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

橘高薫風

政治家に一矢むくいる腹話術

山根 白星

政治家というものは不可解である。毛沢東など見ていると度量の大きさは量り知れないようだ。田中首相など子倅といった感じに見える。さて濁も併せ吞まねば政治家の成長は期待出来ぬのだろうか。それにしても庶民にとっては憤らしいもので、漫談家が政治に触れて不明朗な一点を指摘したのである。人形に物申させたところの一針が鋭い。

両川 洋々

平素口にせぬ酒をお父さんが飲んでいて、いたけない子を介して傷心の念を嘔みしめている姿を描いた。

哀しさを犬と一緒に抱く女

谷 のぶお

愛煩用の小さな犬を女が抱いている。哀愁を抱きしめるように抱いている。犬は主人の哀しさが判って、やはり不安な顔色なのだ。

「天罰のどこかぬところではる儲け」もうまい。

言葉にもいろんな温度がありました

岩 本 笑子

愛情に敏感な新婚の作者らしい句で、心をつものがある。夫の言葉、夫の系類の言葉が、或る時は暖かく、時には冷たく、新婚の胸に打ち寄せられた。「ありました」との回想の型式が句を良くした。言葉には温度も湿度もあるのである。

宗教が妻の道楽逆らわす

井 上 喜 醉

世話好きの奥さんらしく、新興宗教に打ち込んで東奔西走と忙しく、わが家のことは、夫や娘にまかせて、ややもすると滞り勝ちになる。「宗教気狂いや、しょうがないな」と家族は半ばあきらめの態なのである。

土用照り姑の日傘を櫃に入れ

垂 井 千寿子

「姑を亡くし」の前書がある。今年の夏の暑さは異常であった。日傘を櫃に入れたあけの嫁の心づくしは報恩の情である。櫃は「ひつ」、 「ひつぎ」は柩、喪、棺、櫃、櫛、櫛。世をすねて見てもチンピラたか知れ

永 宗 宗 義

チンピラは、上役の言い付けを忠実に言うことは出来るが、人を動かす能力はない。そういう位の人物だから、「すねもの」も「たか知れ」と軽くあしらわれるのである。それでも本人にしては、世の中は自分を中心に回っているような気で、肩で風を切る。

大文字もうしまいやと飲み直し

安 藤 寿美子

大文字は京の風情の深い風物詩である。日が暮れると、大文字の如意ヶ嶽をはじめて、左大文字、船型、鳥居、妙法の火が前後して点けられ、夜空をいろどる。嘆息を上げた観衆もやがて消えて行く火を溜息まじりに見送り、宴席に戻って飲み直す。友人や親戚の家の二階に寄り合っている見物だが、近頃は高層建築物が増え、送り火が五つながら見える所は少ないようだ。

イエスマン会社でるなり苦り切り

守 屋 万 宇

イエスマンのストレスは、会社を出るなり顔に出る。いや、顔色よりも心理的により深く苦り切るのである。ストレス解消には酒が一番安直だ。立飲所かビヤホールへ直行。引金に指掛けたまま説く平和

麻 野 幽 玄

犯人がたて籠る家を包囲して警官隊が「無益な抵抗は止めよ」と叫ぶ。西部劇にもよくある場面である。米・ソ両大国の威圧も、原水爆などの威を籍りた。引金に手かけた姿に似ているのである。強者の人間的弱さ、弱者の人間的強さといったことを老えさせられる。

まだ先が見たい老眼鏡を拭く

大 林 曲 手

末の孫がせめて大学を出るまでは、結婚するまでは欲には限りがない。老いたわが身をいたわるように眼鏡を愛惜する。老眼鏡はわが身なのである。

川柳 中山道六十九次 (9) 富士野鞍馬

42 妻籠つまなご

三富野から一里半(五・九キロ) 駅中南北三町相對して巷をなす、其余は山間に民居多し。

妻籠古城駅の東にあり、城趾現存す。天正十年木曾義昌これを築きて、山村良勝をしてここに居らしむ。同十二年、秀吉公木曾義昌に命じて伊奈路を禦ぐ、義昌兵を良勝に増して妻籠城に籠る。時に伊奈の郡主菅沼小大膳、諏訪保科と兵を合せ、木曾を襲んと欲す。急に蘭の砦を抜て妻籠城を攻る。良勝士卒に命じて鳥銃(てっぽう)を放ちこれを防ぎ、伊奈軍登る事を得ず、退ひて遠巻にして、且水道を断つ。城中水無くして白米をもって馬を洗ふ。敵これを見て、城中に水沢山なり、城堅くして抜くべからずとして、軍を退けて伊奈口に帰る。良勝伏兵を設けてこれを討つ、士卒死亡する者多し、菅沼大に敗走す。世に良勝の功を賞す。

妻籠の北はづれに鯉岩がある。形鯉に似て、挿絵に描かれてある。また南に雌雄(めお)の滝といつて二流の滝がある。

お六の元祖お六は此所の人であつた。文七とお六は髪の色かき。

詳道(五四四)

文七が女房お六でいりくつ

金牛(五七二八)

文七とお六小間物友かき

集馬(八三二五)

文七が結ぶもお六がすけばこそ

一米(九一三五)

文七元結は信州飯田から発売
お六櫛については、藪原の項に詳述した。

43 馬籠うまなご

妻籠から二里(七・九キロ) 駅中南北三町
其居民居山中に散在す

ここから東熱川(にえかわ)まで二十一里(八二・五キロ)の間を「木曾路」という。妻籠からの中間に馬籠峠があり、所々に棧道がある。

駅の西に丸山城趾あり。

44 落合

馬籠から一里五町(四・五キロ) 此宿賤し、火繩を製して売る家あり。昔落合五郎が居た所で、西方林中にその霊を祭る祠あり。十曲(きよく)峠は馬籠と落合の間にあつて、美濃信濃の国堺である。従つて此所から

美濃の国である。(岐阜県)

45 中津川

落合から一里五町(四・五キロ) 宿内相對して巷をなすこと五町ばかり、余は山間に散在す。右に苗木城見ゆる。

46 大井

中津川から二里半(九・八キロ) 此宿山中にして、相對の家三四町ばかり、余は山間に散在す。

宿の南に西行法師の古跡「花なし山」がある。また二キロ西に西行法師塚、西行硯池がある。西行法師東行の歸りに三年間ここに住して竹林庵という庵の古跡を遺す。

思へただ花のなからん木の本に
何をかけにて我はすみけん(西行)

47 大久手

大井から三里半(一三・七キロ) 宿賤し。南に竈(かまど)山があり、美濃の国かまどの山の日くるればけふりたへせぬ敷をぞする

と古歌に詠まれてある。
近くの巻金村山中に、伊勢参宮又名古屋へ
別れ道がある。

48 細久手

大久手から一里三十町（七・二キロ）山家
也。坂多し。京より下りは此所まで登り、こ
れより東は下りがち也。細久手は土地の高き
所なり。
琵琶峠・細久手より二キロ、道至って峻し
く岩石多く、上り下り一キロばかり、坂上よ
り木曾の御岳、加賀の白山が見える。ほろ
岩、えぼし岩などが挿絵にある。
月吉日吉の里・細久手の南、土岐郡の内、
月吉日、日吉里、両村双べて里あり。此所より
三日月形の白石出る。名石なるゆえ世に賞美
す。

夜の昼のさかいはここに有明の
月吉日吉をならべて

（西行）

49 御嶽

細久手から三里（一一・八キロ）宿中五町
ばかり相対して巷をなす。其余散在して山間
に居す。
宿の西に天台宗願興寺がある。本尊蟹薬師
は伝教大師の作、挿絵に描かれてある。

50 伏見

御嶽より一里五町（四・五キロ）
これより西は多く平地なり、往還の左右に
列樹の松あり。東海道の如し、是より東には
列樹の松なし。山里なればなり。

51 太田

伏見から二里（七・九キロ）此宿相対して
巷をなす事五町ばかり。此所より飛驒の国へ
越る道あり。

駅の東に太田川が流れる。ここは舟渡し。
金山古城は、信長の臣森三左衛門の居城で
あった。

木曾川下りには、ここから大山まで絶景であ
る。

名産美濃紙は、太田の乾の方武芸郡から多
く出る。厚くて強く障子に張られた。

美濃紙の内で三河を嫁笑い

番貞（六一・34）

美濃へ穴明けて三河を嫁覗き

金牛（五九・18）

障子の内から正月の万才を見る嫁

長野文庫著

『愛媛川柳の流れ』

定価 千共 五〇〇円

第一章「川柳概説」第二章「川柳史」「第
三章「愛媛川柳史」第四章「大正川柳史」か
らなる「愛媛川柳の流れ」というより「日本
柳史の流れ」ともいうべき好著。（不）

発行所 〒794

今治市港町八丁目

文学社 長野文庫



橘高薫風の第三句集成る！

肉眼

定価 千 円
送料 本社負担

題字・藤沢桓夫先生・序文・中島生々庵主幹

人気プラス円熟の薫風川柳がずらり四百五十句。

発行所 〒542 大阪市南区巖谷仲之町二〇

川柳塔社

路郎賞の小浜牧人氏（岳人氏撮）



川柳塔賞の堀江芳子氏（代理正朗氏）



48年度川柳塔社同人総会

地下鉄谷町九丁目下車南へ三百メートル、大阪府中小企業文化会館というのが10月7日、つまり今日の会場である。

降りかけたが傘不用という天候で足もとの心配もなく、遠来本田恵二朗、山内静水、浜野奇童、堀江正朗諸氏を迎え同人総会らしい盛り上がりには会場は開会を待つ顔、顔。顔。

正面上

式次第

司会（開会の辞も）

議長選出

経過報告

会計報告

役員改選

質疑応答

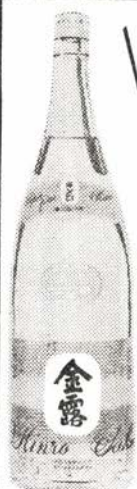
閉会の辞

西尾 葉
中島 生々庵
川村 好郎
若本 多志
中島 生々庵
若本 多志
菊沢 小松園

とあり、総会はプログラムを追って進められる。中島生々庵主幹が議長に選出され、川村好郎氏が経過報告をされた。主幹をはじめ幹部諸氏が内外の大会に出席、年を追って前進をつづけている。同人も昨年から21名もふえ、現在もふえつつあり、購読者もふえている。編集部も一丸となって一日も早く発行し、よりよい雑誌にするために努力している。『近作柳樹』から『水煙抄』とタイトルをかえ、このカッパには柳人書家久米奈良子さんが筆をとり水々しい感じを誌面にあふれさせてくれた。と好郎氏の報告がおわる。会計報告の若本多志氏はさすがに社長業のベテランだっただけに、正確に数字をならべ懇切丁寧に報告された。この中に注目させられるのは諸物価の高騰である。とくに印刷

費の値上げが目立った。（本年にはいってその値上げ攻勢は目をおうものがある）これらのものは特別会費（役員諸氏）によって補なわれている。と、力強いものがあるが、印刷用紙の不足からも安閑としておられない情勢であることはまちがいない。つづいて役員改選に生々庵主幹が登壇された。結果は現役員全員留任となった。そして常任理事会で定められた新役員が発表されたのである。（敬称略）

参事
長野文庫（今治市）森田茗人（鳥取市）
常任理事
西いわを
理事（順不同）
福島鉄児・岩本雀踊子（奈良県）中川晃男



金露

費の値上げが目立った。（本年にはいってその値上げ攻勢は目をおうものがある）これらのものは特別会費（役員諸氏）によって補なわれている。と、力強いものがあるが、印刷用紙の不足からも安閑としておられない情勢であることはまちがいない。

つづいて役員改選に生々庵主幹が登壇された。結果は現役員全員留任となった。そして常任理事会で定められた新役員が発表されたのである。（敬称略）

灘を支える
灘の味

清酒

キンロ

金露酒造株式会社

(松江市) 小幡里風(倉敷市) 越智一水(今治市) 藤井春日(倉敷市) 永尾英断・遠山可住(兵庫県) 横山一声(岡山県) 野村太茂津(和歌山市) 三井静夢(香川県) 村田瓢太・島居百酒(西宮市) 高杉鬼遊・香川静々・宮口笛生(奈良市) 中川滋省・竹中肖二・大矢十郎(新宮市)

編集部

河内天笑・板尾岳人。

質疑応答の若本多久志氏へ、好郎、鉄児、奇童、瓢太、柳太、静水諸氏が立たれた。

理事の役目は本社発展のため。活動不能の人はその人柄が理事として必要である。

会計報告の中に諸物価の高騰のかげに編集費などが低いのは万々承知だが、川柳愛に結ばれた同志として辛抱してもらっている——

大会などの記事は早く本社へ送ってもらわないと本誌に発表が出来なくなる。

早いところは大会三日目に写真と原稿が速達で届けられているなど、明快に応答された司会の極め付、西尾葉氏が、ありし日の路

一分間の柳論

かつての本社句会の課題吟で「強盗」という出題があり、投句の結果抜けた私の句に

強盗の不敵 酒まで飲んで逃げ

路郎師の軸吟がまことにふるって

強盗の洒落ているのは 飲んで逃げ

師の句には強盗を一途に憎めない人間

郎先生を描いた堀口塊人氏の原稿の一部を朗読され好評だった。

閉会の辞はご存じ菊沢小松園氏、来年の改題十周年記念へ足音を高めて前進あるのみ。

▼祝電—弓削川柳社ほか。(不)

出席—柳宏子・与呂志・滋雀・新之助・凡九郎・鶴声・鬼遊・静馬・奇童(岡山県) 百酒・鉄児・恵二朗(倉敷市) 古方・一二三・瓢太・太茂津(和歌山) 正朗(島根県) 葉・小松園・雀踊子(奈良県) 一三夫・葵水(和歌山) 薫風・いわを・多久志(西宮市) 三十四・肖二・綾女・形水・水客・好郎・一舟・静少・季賛・静々・牧人(神戸市) 敏・重人・文秋・生々庵・メ女・摩夫郎・柳志・野迷路・南柳・柳信・静水(竹原) 敬称略。

大陸川柳作家同窓会

垂井 葵 水

久家代仕男

の断面がユーモアに描写し尽され余韻を残している。私の句には強盗のふてぶてしさのみの報告に終わっている。この相違を、これなる哉と感心した記憶が今も去らない。川柳は人生の縮図であり、達観より生れた人間の詩である。言葉の遊戲や理屈であってはならない。

九月十五日岡山県高梁市で行なわれた第九回大陸川柳作家同窓会は全国各地から約七十余名が参加、本社同人は森田茗人、河村日満(以上鳥取) 大山と金(東京) 野村太茂津、垂井葵水(以上和歌山) らに茗人氏の華子夫人ご令息、赤木喜美子(高槻) さんらも参加し、当日六題二十四特選句中七賞を獲得するなど大活躍だった。

別々に憶えた顔と名がピタリ庭少し入れて老後の青写真三寒四温やがて京城の冬思う湯上りの妻しあわせそうな顔ハルピンを語る日若さとりもどしロシヤ語科出てハルピンの夜の紳士軍法に触れない罪に残る悔

☆11月の句会

▼葉の花句会は十二日(日)午後六時から、八尾天満宮(近鉄八尾駅下車南へ三百米) 兼題「魚」「肥え」「物思い」「スプーン」席題二題。投句先変更 5818 八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸。

▼堺若芽合同句会は十三日(火)午後六時から八木摩太郎宅。兼題「光」「ズボン」「そっくり」「場違い」

▼南海川柳会は十五日午後六時。兼題「ちぐはぐ」「高架」「小粒」会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会は二十日午後六時。兼題「会員」「鳩」「冗談」「みみず」会場は松崎町二丁目と貴荘。

七五三詣り

小野克枝選

七五三宮へ着いたと揺り起し
 八月児を育てて七五三の礼詣り
 七五三賽銭箱は見捨てられ
 七五三の晴着きせたい車椅子
 デパートの笑い止まらぬ七五三
 こつぱりがよたよた逃げる七五三
 子の心騒躡るまい七五三
 神主とデパートぐるの七五三
 七五三詣りうちには母がない
 町内のよしみで送る七五三
 七五三詣り人形の歩巾です
 神殿の紅が目を射る七五三
 七五三親の願いを子は知らず
 泣いた子がこんなに重い七五三
 親バカもここに極まる七五三
 お帰りはもう不機嫌の七五三
 七五三知らず施設の子は育ち
 七五三詣り親と子供のフアッシュ
 子を生めぬ人が笑った七五三
 礼装の大将がいた七五三
 七五三母の虚栄も着て詣り
 七五三詣りが羨ましい子無し
 家計簿へ赤がもつれる七五三
 七五三孔雀のような子等ばかり
 七五三詣り未来へ鈴をふり
 外孫と内孫同じ七五三

あんな日もあったアルバム七五三
 母も子もロンドンで揃えた七五三
 神様が飴用意する七五三
 千歳飴下げた晴衣に散る紅葉
 七五三親の期待が重すぎる
 七五三母の期待を負うリボン
 七五三詣りへ祖母も薄化粧
 七五三華麗に平和の幸思う
 ダイレクトメールで知った七五三
 かしわ手も欲張ってなる七五三
 神様も苦笑いして七五三
 七五三あの子が生きていたならば
 七五三すでに反抗期のすがた
 赤ヘルを冠るなうちの七五三
 七五三主役は背で寝てしまひ
 義理の子に家紋が似合う七五三
 宮詣り鳩にも幸を分けて撮り

佳

未熟児の見劣りもなく七五三
 七五三昔の恋とめぐり逢い
 人間がおもちやにされる七五三
 闘病の児にも持たせる千歳飴
 七五三僕は防空壕でふるえてた

人

子を持った幸せここに七五三
 父よりは賢くなれと七五三
 着せられる訳が解らぬ七五三
 習わしにならう女の七五三

芳子 美子 弘生 金三 思月 奇童 好一 静水 葵水 泉 みのる 素身郎 貞汀 白祐 輝親 本蔭樺 かつみ 右近 苦句 白汀 梁水 素身郎 芳子 章雅 みのる

使います

高木桃里選

高鷲亜鈍著「白黒記」売り切れ。同氏の「詩川柳考」残部少々。送料共五百円。

西尾 栗句集

『水 鶏 笛』

阿万万的・松川杜的共著

『的』

送料共 六百五十円
 送料共 四百五十円

使います出来ぬ性分金を貯め
 使います活かす工夫のない世相
 使います慣れて使えるものを捨て
 使います嫁と娘とうまが合い
 安物を買ひ使います自慢する
 この辺でおさらばしたい使います
 近所の目盗んで運ぶ使います
 使いますの人生がある養老院
 使いますでどうし養老院の恋
 使います時代女房も新にし
 使いますついに原料底につき
 合理化の果は人間使います
 アイデアの使い易くて捨て易く
 資源ない国をあげての使います

伊津志 秀峰 綾女 カズエ 道子 利美 代仕男 与根一 芳子 七面山 肖二 右近 智司 翁童

ポリ袋洗って干してのおばあちゃん
使ひ捨てにす内職の袋貼る
マンションの暮しあつさり使ひ
使ひすて姑が拾つてもめている
嫁がすて姑が拾つてもめている
半分は虚栄もまじる使ひすて
使ひすて明治の母の淡い顔
安いさかいに使ひすて買うてみる
修理費で新品買える使ひすて
使ひすてあしたは明日の風が吹く
使ひすて依頼退職とも云われ
使ひすてせねば片付かない団地
使ひすて拾ひ集めて生きる職
旅に出るときは便利な紙おむつ
使ひ捨て拾つて戻ろうかと思う
使ひすて月賦に追いまくられても
使ひすて時代離婚もその気なり

寿美子
保水
翠月
軒太
好一
里風
古方
本蔭
曉音
潮生
千翁
弘生
宵明
克枝
耕水
素身
与史

佳

囑託の座にとどまった使ひすて
使ひすてしたい包帯高くなり
流行があと追いかける使ひすて
腰紐になるネクタイの派手な柄
道具ならもう捨てられる年になり

人

使ひすてここは家裁と云う捨場
他

天

使ひすて時代に背く母であり

天

使ひすてられて明日の夢を撰る

凡九郎
克枝
葵水
宵明
隆子
白水
祥月
梁水

軸
持つ国を真似て佯びしい使ひすて

劇 画

阿 万 万 的 選

脚本に新語入れた紙芝居
劇画でもハッピーエンドは青い空
怪獣の劇画で一人っ子が育ち
劇画からヒントを得たり捜査陣
過疎村と劇画でむすぶ坂を越え
合ひ槌を打って劇画につりこまれ
ボルノ劇画テレビは茶の間遠慮
再評価の時を信じて劇画描く
バロムワン父子が笑うママの留守
劇画のおかげで新興の観光地
劇画ガメツく下品な色で刷り上
肝心な場面は想像さす劇画
劇画読む合ひ間に勉強はさみこみ
低俗な劇画一億総白痴
劇画ラスト涙の色となる真珠
コマ数をバキーンで劇画と嫁
仄光と飛沫次号となる劇画
温かい結末はとした劇画
劇画ブーム変な日本語が生まれ
劇画から好ましくないヒントを得
み仏の劇画で人の道を説き

扇水
本蔭
康博
秀峰
無汀
白雅
章親
輝親
かみ
魚山
古方
右近
翁童
香珠
曉童
寿美子
宵明
芳子
梁水
素身
隆子

満二才劇画のとおり首を振り
息をのむ劇画白けるコマシヤル
劇画さえ種切れしたるリバイバル
幻想と現実交錯する劇画
簡単に血が飛び人が死ぬ劇画
劇面から夢はみ出して行く劇画
ワクはみ出して殺されている劇画
劇面犯濫商魂だけが露出する
ちっばけな夢を訓している劇画
凹や凸、魚眼レンズで描く劇画
三枚目劇画のような声を出し
抜目なく劇面を盗むコマシヤル
フィクションですと言ひ訳す劇面
時代考証の苦勞の跡もある劇面
子等向きの劇面に再起教えられ
秀才が劇面の中に見たロマン
弱点を握る劇画が怖くなる
地
生いたちが僕によう似ている劇面
天
金力の恐怖劇面に見当らず
軸
劇面本伏せてやっぱり肩がこり

残部少々
『清水白柳遺句集』
後藤梅志著
『秀句鑑賞と梅志句集』
送料共 六百五十円

千共七百円

初歩教室

題「家」

本田恵二郎

過疎の家守る貧乏くじを引き

辰江

思つたまをそのまんま述べたら、ちゃんと句になった。しかも一応出来ているが、川柳なんてわけなく作れるなと思つたら赤信号である。名句佳吟はさりげなく、軽く詠んでいるかに見えるが、深い思索のはてに生れたものであることを銘記しなければならぬ。

同

あばら家が住み心地いと虫の声
(あばら屋の居心地虫の音に巻かれ)

同

(あばら家の取柄は虫がすだき寄る)
(あばら家へすすぎが招く虫の声)

同

(あばら家の雨戸を叩く虫の声)
(あばら家へごきげんさんと虫の声)

同

一つの句材をとらえたら、それに関連した句材をじりじりと探求してみる努力があらねばならない。そこに楽しさと進歩とがある。

同

嫁く娘に家風を早くのみ込めと
二人目が生れてやっと家の嫁

同

言わんとする心は判るが、句姿が整っていないので、折角の良心が死んでしまう。叙

法に四苦八苦して、表現に磨きをかけてから発表する心構えが肝要である。

(嫁く娘へ家風に染まれと母ごころ)

(二人目を生んで家風に染りそめ)

マイホーム息子の嫁の持参金

(持参金で建てたらしいと村雀)

挨拶は上下二軒両隣

(お早ようさん上下二軒両隣)

家柄を今は言うのとれぬ二人

(家柄などもう言うのとれぬ仲となり)

大安に建家の槌音湧える大安日

(たてまえの槌音湧える大安日)

実家から仕送り学生夫婦です

(学生夫婦実家の母に支えられ)

家計簿の赤字に内職が立たず

(家計簿の赤字が内職あざ笑う)

傾いた主家昔日の恩を亮る

母ちゃんの苦労がにじむ家計簿

(家計簿から妻の苦労がはみ出そう)

この土も草もわが家のものである

昼寝する妻もわが家という寝よう

(老妻の昼寝わが家という寝相)

新築の家に燕は巣を作り

(新築ですなと燕が巣を作る)

家建てた安堵の夢を妻と見る

2DK泊めてやる部屋のある安堵

(泊めてやる部屋あり2DKの安堵)

家の味カロリーオンリーに嫁御変え

(家の味カロリー主義に変えた嫁)

家柄が違いまっせと出鼻打たれ

(家柄が違いまっせとそっば向き)

妻は太陽女のいない家冷え冷えと

(妻のいぬ家北極を想わせる)

嫁の口実家の知恵も混って居

(嫁の知恵実家の知恵もちとまじり)

かけごとに負けて家路の足重く

(ギャンブルの敗者へ家路の灯がまぶし)

新婚で家新しく出発点

(新婚の新築うれしくひがまれる)

(新家庭悪友ぞろろ妬きに来る)

合掌造りはやるモータールモダンです

(合掌造りこれもモータールあれもモータール)

倅せのつに帰える家が

(倅せはいそいそ帰る家があり)

妾宅をセカンドハウスと云いのがれ

(妾宅をセカンドハウスと云いのがれ)

庭のある家に住みたい団地族

手離れた家にも今年も柿熟し

(手離れた家にも今年も柿熟す)

家を捨て都会に出たが道迷い

(家を捨てて出たが都会の空気に負け)

愛着のしみた家だて落着かれ

(愛着のしみた家ですあぐらかく)

カタログと妻家家家と攻めて来る

(カタログと妻家家家と攻めて来る)

青写真ばかりかぶって夢の家

共稼ぎ自分の家の出来るまで

もう一年払えば自分の家になる

(あと一年払えばほんとの我が家です)

家にいてどこでも行けるかたつむり

(かたつむり家を背負ってどこへ行く)

老母を呼ぶ家に可愛い庭作る

みどり

同

かつみ

賛平

秀村

志津

ますゑ

濁水

同

藤持

同

陽山

幸生

同

生仏

同

繁子

大萬川柳

「距離」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 五百三十三句
 入選 五十八句

神戸牧人
 距離おいて見れば自惚れを気付き

大阪文秋

もらわれた子供と知ってから距離

松原史好

食卓を囲む親子の遠い距離

堺天笑

お互にメッキの禿げぬ距離をとり

堺真沙子

射程距離に入って続かぬ軍資金

藤井寺吸江

長距離の列車もたのし国なまり

大阪あいき

夫との距離からうじて子が継ぐ

笠岡桃里

地球儀へ母国の距離を目で計り

笠岡忠三

床柱の眼中にない距離で呑み

富田林弥栄子

居きそで届かぬ距離に居る女

島根芳子

故郷の距離引き寄せる柿が着く

西宮康博

追いつける距離でライバル意識

松原サヨ

まだ五十路俺は長距離選手なり
 倉敷素身郎

倉敷素身郎

長距離を走る構えの父でよし
 香川酔夢

香川酔夢

距離おいてみれば姑人がよし
 大阪十止庵

大阪十止庵

車間距離守っておれば割り込まれ
 大阪智司

大阪智司

妥協してスーパのさる距離に住み
 大洲暁明

大洲暁明

ぶつかってみれば高嶺の花でなし
 倉敷菩句

倉敷菩句

距離置くと恋の炎が燃えさかり
 橋本木魚

橋本木魚

ふるさととは年に一度の距離にあり
 倉敷里風

倉敷里風

あなただけよと大中に距離を詰め
 富田林美代

富田林美代

傷心を守るやすらぎ距離を置く
 名古屋弘志

名古屋弘志

出来のよい嫁が程よき距離に居る
 松原サヨ

松原サヨ

老いの坂頂上の距離遠くあれ

松原サヨ

岡山宗義
 愛確か今夜も長距離電話する

岡山宗義

愛冷えて所詮戻れぬ距離にいる
 倉敷千翁

倉敷千翁

ふるさとの距離へばかりお月さん
 松原重人

松原重人

それからの距離が家裁の門くぐる
 尼崎徹也

尼崎徹也

親友だから一定の距離をおく
 奈良本陸棒

奈良本陸棒

慕情もう届かぬ距離へ去った人
 倉敷白水

倉敷白水

腹割ってからの心に距離がない
 大阪章雅

大阪章雅

プライベートの距離保ち信じ合
 東大阪弥生

東大阪弥生

もう距離のない仲と宝石囁いた
 大阪頂留子

大阪頂留子

美しきもの美しく見る距離にいる
 大坂理子

大坂理子

真心にとけてちぢまる義理の距離
 倉敷筒子

倉敷筒子

距離おけば燃えてた恋の馬鹿らし
 石塚あかね

石塚あかね

石塚あかね距離で吠えてみる
 宝塚静馬

宝塚静馬

遠距離の云いわけ通らぬ新幹線
 富田林花梢

富田林花梢

のび切った距離をつないでいる戸籍
 大坂文秋

大坂文秋

そのうちにわかっていく距離を

大坂文秋

大阪緑水
 揺りかごのほどよき距離にも暖炉
 完敗へもう距離感のない握手

大阪緑水

気短かと気長家外近い距離
 和歌山太茂津

和歌山太茂津

妥協する距離を縮める道を振り
 西宮百酒

西宮百酒

貸しそうな姿勢で銀行距離をおき
 兄さんと呼ばれる距離で片思い

兄さんと呼ばれる距離で片思い

営業所

阿倍野店

堺店

住吉店

平野店

都島店

今福店

十三店

九条店

八尾店

良いよい

月賦百貨店

丸越

credit system

本社

大阪市阿倍野筋3-15-1

TEL 632-3806 3807

倉敷扇水

学歴に引き離された椅子の距離

追いつける自信の距離で力まない

佳句

旅に居て母の心を傍に置き



(冊途につく左から岳人・与呂志・生々庵・薫風諸氏)

富田林 弥栄子
人妻がほよい距離で匂わせる

和歌山 葵 水

そこまでは言うてはならぬ距離を

和歌山 太茂津

愛憎の距離むきだした世が怖い

神戸 どんたく

あくせくとするなと光る星の距離

人ノ句

大阪 好一

近すぎた俸せだから見失い

地ノ句

東大阪 弥生

受話器を気まぐすくおいてから距離

天ノ句

郡山 カヅエ

距離おいて観るからバラの美しい

選者吟

初対面くらしの距離へもう無口

選評

一、類句の多かったことはいつもの通りですが、今回は安易に作り放しの句、やたらに気取った不消化の句が多いが目立った

一、天ノ句は力まずに広い意味を詠んでいるバラは動かない。花だけでなく、人間関係をも含ませている。

一、あと一回、ラストヘビーをかけるのは誰だろうか。

昭和四十八年度

ベストテン (九月現在)

- 二一花梢 二〇、〇 富田林
- 二二弥生 二〇、〇 東大阪

- 三 弥栄子
- 四 文秋
- 五 好一
- 六 一三
- 七 克枝
- 八 醉夢
- 九 真沙子
- 一〇 吸江
- 一一 史好
- 一二 梁水
- 一三 本蔭棒
- 一四 カヅエ
- 一五 緑水
- 一六 一栄
- 一七 芳子
- 一八 桃里
- 一九 牧人

- 一八、五 富田林
- 一六、五 大阪
- 一五、五 大阪
- 一四、五 堺
- 一四、〇 倉敷
- 一四、〇 香川
- 一四、〇 堺
- 一三、〇 藤井寺
- 一三、〇 松原
- 一二、五 倉敷
- 一一、〇 奈良
- 一一、〇 郡山
- 一〇、五 大阪
- 一〇、五 大阪
- 一〇、五 島根
- 一〇、五 笠岡
- 一〇、五 神戸

- 二〇 どんたく 一〇、〇 神戸
- 二一 百酒 一〇、〇 西宮
- 二二 重人 一〇、〇 大阪
- 二三 太茂津 一〇、〇 和歌山

昭和四十八年度最終回

「結束」五句以内

締切 十一月二十日

昭和四十九年度第一回

「出直し」五句以内

締切 十二月二十日

投句元

〒583堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三

大萬川柳係

第25回西日本川柳大会余聞

ミニ座談会

- 福島 鉄児
- 浜野 奇童
- 不二田 一三夫

一「ご遠路のところ、ようこそ」

奇「大会では生々庵先生はじめ大変お世話になりました」

鉄「一三夫さんに文句云わんならんね」

一「なんですよ？」

鉄「よその大会の記事が出ているのに弓削川柳社が出てないでしょう」

奇「来年は路郎先生の句碑建立25周年記念ですから私こそ気をつけます」

一「さ、それですが、どんな手違いがあったのか原稿も写真もこなかったのですよ。うちは月の十日には全部原稿を印刷所へ入れてしまうので、乗りおくれるとね……」

奇「私にも責任がありました。時間に追われっぱなしでしたから」

鉄「こつちもちよっと体の調子をわるくしていたので気だけイライラしてな。去年もそやったので。」

一「つきからばくが気をつけるようにします。」

奇「来年は路郎先生の句碑建立25周年記念ですから私こそ気をつけます」

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

▼川柳塔社48年度の二賞発表句会と同人総会が十月七日、天王寺区の大坂府中小企業文化会館五階で開催。各地から本社同人が多数参加、盛会だった。

▼中島生々庵主幹は「フジサワ薬報」秋季号(「薬と医者」)を執筆。古句と現代の句を組み合わせた軽快なタッチで川柳のいまむかしを表現されている。

▼東野大八氏は大陸同窓会の三泊四日に大いに羽根をのばされたが、仕事より疲れたとのこと。その帰途石原青竜刀氏は大八氏宅で一泊された。

▼番傘創立65年記念「全国巡回近畿川柳大会」は岸本水府川柳「刊行記念」は11月25日午前10時から大阪府農林会館(東区法門坂町10)で開催。(欠席投句はお断わり)文化映画「川柳史探訪」上映。詳細は大坂市北

区伊勢町一岡山ビル内番傘本社事務局へ。

▼48年度兵庫県文化祭第一回県民川柳大会が10月21日1時から神戸市葺合区明治生命ホールで開催。本社から若本多久志氏(西宮市)が選者として出席された。

▼柳都は12月号で三百号になる。満25年をふりかえり、先輩のことばをもう一度噛みしめてみたいと、その感動の一節を募集している。

▼さっぽろ九月号は北海道川柳大会特集号。北海道川柳連盟の年度賞は「一合で足る日五合で足りない日」ほか四篇。横山紫朗作。連盟賞は「金のある孤独やたらに鍵をもち」ほか三篇、出村幸司作。同賞「晩年のほうどうだっという手相」ほか四篇、船津睡蓮作。

▼ふあうすと九月号で「路郎の『番傘』時代」堀口塊人。はわれわれに身近な文章で興味深いもの。

▼噴煙吟社は8月5日、桜里、瀧明、放亭合同忌川柳大会を熊本市社会教育会館で開催。

▼国鉄川柳九月号は第17回全国大会特集号。雑誌山脈集は本社同人阿万の選である。

ある。

▼川柳能因九月号に「川柳界の独善主義者」名誤死水は「最近『柳誌』を斬る」など云うて好感を持たない他誌から悪いものだけ拾っている」と、小文ながらしめて味よいが、この筆名が気になる。

▼関水華編「全国川柳作家自句自解集」発売。定価八百円。二四四。〒250小田原市鴨宮三七二川柳路吟社。

▼句集古備団子第二十四集原稿募集。自選十句。十二月十日締切厳守。参加費六百元。発行一月下旬の予定。原稿送り先〒708岡山市津島東四丁目十八番H3の401川柳岡山社内吉備団子編集局。

▼川柳人協会主催の第八回川柳文化賞贈呈川柳大会は11月3日、東京、印刷会館で開催。大阪から堀口塊人氏が「安全」の選者として出席される。

▼川柳思潮七・八月号は清水米花追悼号となっている。「川雉」時代「川柳家の二十四時」にご執筆ねがったことがある。

▼八木摩太郎氏(本社参

事)の句碑が堺市大仙町仁徳御陵前広場に建つ。(詳細は本誌参照)句は「ふるさとは大仙陵のあるところ」また氏の第五弾著書として「心のふるさと」が十二月二日に発行(非売品)。

▼川柳平安二百号記念誌上大会発表号(十月号)は全句数四四〇句を筆頭に七六句まで各選者の熱意は買われてもいいとおもう。

▼長野文庫著「愛媛川柳の流れ」が〒794今治市港町八丁目文学社長野文庫から発行(本誌参照)川柳を

知るうえにも必読の書。

▼第九回山陰川柳大会から寄せ書拝受。葉、薫風、メ女、千代、瑞枝、花子、竹馬、一保、洋々、酔夢、祥月、たつみ、茗人、白汀、明朗、緑之助諸同人のはか多数。なお総合一位に両川洋々、二位に八木千代、三位は長岡鉄花諸氏。

▼米沢曉明氏(大洲市)から「香港、台湾の旅に出ました。百万ドルここは値上げをせぬ夜景」パスポートの旅はなかなかやこしものでした」と。

▼若本多久志氏(西宮市)



新芯鋭

いつまでも細く書ける硬質サインペン

黒・赤・青
1本50円

ライオン
ジェットペン

福井商事株式会社

九月の「けいさつ」の友「川柳漫談は本社句会の席題」警官」から婦人警官の句を紹介された。

▽同人の動向△

▼本田恵二朗氏（倉敷市）は九月八日テレビ岡山へ児島献血協力会理事長として出演。その番組に弓削の川柳角力が放映され、私も弓削川柳社もその柳縁に驚きました。末っ子（高校の先生）の嫁が決まりそう、と。

▼渡辺曉童氏（愛媛県）から「八月十五日末娘に男孫誕生、正芳と命名、これで女五、男三の孫保有」今年から佳き日八月十五日―曉童。

▼児島与呂志氏（大阪市）は五月に大阪市奉職二十五年勤続表彰、八月は銀婚、十一月は愛嬢の結婚と、今年の幸わせをよるこび芦原温泉へ―お祝いの三つ重ねの幸旅の宿―与呂志。

▼大矢十郎氏（新宮市）の長男喜一氏は山内康江さんと九月三十日に大阪法円町共済会館で華燭の典。葵水氏が披露宴で柳話、南大阪川柳会の人々が祝吟をおくなど柳人の祝福を受けられた。

▼奥谷弘明氏（倉吉市）から「夏のつかれやら、いろ

新同人紹介

両

川 洋 々

―茗人・貞山推薦―

増

田 竹 馬

―葵・千代・瑞枝推薦―

石

垣 花 子

―葵・千代・瑞枝推薦―

いるな気苦労が重なり九月十二日に発病、県立厚生病院へ入院。川柳塔の投句は一度も休まなかったのにこんどだけは締切に間に合わない残念です。なお病名は不明です。一日も早い全快を祈ります。なお山陰川柳大会の後、葵、薫風、女、千代、瑞枝、花子、竹馬の七氏が見舞われた。

▼浜野奇童氏（岡山県）から西日本川柳大会には生々庵先生はじめ川柳塔の皆さんにお力添えいただきありがとうございます。来年は路郎先生の句碑建立25周年ですので、本年以上の成果をと思っております。

▼同氏は本社の同人総会に出席。

▼小西無鬼氏（兵庫県）はこのほど県立文化会館でOB大学趣味講座で川柳とユーモアについてを語り好評だった。

▼小幡里風氏（玉島）は九月八・九日玉島中央公会堂で呉服の展示会新美展を開かれて盛会。見つめられ振りわかれるあなたの美しさ。

▼山田季賛氏（高槻市）は広島から週に一日高槻へ帰

り、竹原の大会や弓削の大会にも出席、相変らずとび回わっておられる。

▼池田古心氏（岡山県）の「かがみ」例会の十一月二日の題―米・霜・枯れる。十二月二日の題―十二月。喋る・払う。会場古心宅。



▼羽原静歩氏（守口市）五湖めぐりから―墨絵めくく白糸冷々見て歩き―静歩。

▼西尾葵氏（八尾市）から加賀屋にて―家持の妻恋舟か春の海―の虚子の句碑がありました。―湯加減を誤ねてくれた能登訛―葵。

▼橋高薫風、板尾岳人両氏は九月十五・六日家族同伴伊勢路へ行楽湯の山温泉に一泊。月の夜は青電になる滝一つ―薫風。また岳人氏は九月二十三日の連休に長男を連れて大杉谷より近畿の屋根を従走。―山男だけが知っているかくれ滝―岳人。

▼小川静観堂氏（伊丹）は九月二十日故夫人の納骨のため故郷大洲市へ帰郷された。フェリーの旅に少々疲れたとのこと。

▼堀江正明氏（島根県）の同人総会出席に薫風・岳人両氏がつききりて世話をされその柳情に感激された。

▼故河相すゝむ氏五周忌の九月十九日、小浜牧人、窪田久美子、室田千尋、鳥本泰、林夢虹、橋高薫風の諸氏が墓前に参集故人を偲べた。

▼不二田一三夫氏が秋田実先生宅へ病氣見舞いに行かれたが東京のコロムビア・トップ師も見え、世相をえぐる会話の中にユーモアが躍如としていたとのこと。

▼本多柳志氏（大阪市）の住所前号訂正―大阪市城東区今福東三ノ四（九号）三〇九―同氏から大広の機関紙10月号「私の好きな食べもの屋」特集号に新之助の店が「味・量・価格の三拍子揃った店」として紹介されたことを知らせてくださっ



48年度二賞発表句会

路郎賞 小浜牧人・本田恵二朗・小出智子
川柳塔賞 堀江芳子・谷のお・荒田つる

会場 大阪府中小企業文化会館

10月7日

同人総会へ出席した人にはダブルヘッダーという句会、奈良・兵庫・和歌山の方は別に岡山県から浜野奇童・本田恵二朗・永宗宗義・広島から常連山内静水・島根の堀江正朗諸氏が遠来ご出席。遠路ありがとうございました。

場内に竹原の横田英詩氏作「川柳小唄」が流れ、正面にかざられた六個の賞牌がさんせんと輝くところ、さすがに二賞発表会場の華やかさが心をあたためる。

生々庵主幹の柳話は昨年の柳話と同じようにジャコビニ流星雨にふれられ、受賞者が消えることなくいつまでも輝きわってほしいと結ばれた。芳子さんのかわりにご夫君正朗氏が女婿松浦敏彦氏に手をひかれ受賞。路郎賞の小浜牧人氏にも万雷の拍手。――今月の月間賞は菊沢小松園氏。(不)進行・西田柳宏子

出席 与呂志・柳宏子・滋雀・新之助・凡九郎・鶴声・鬼遊・静馬・百酒・奇童・鉄児・恵二朗・古方・一二三・瓢太・榮・小松園・雀踊子・一三夫・葵水・太茂津・正朗・薰風・いわを・多久志・三十四・肖二・綾女・薰形水・水客・好郎・一舟・静歩・季賛・酔々

・牧人・柳志・敏・重人・文秋・生々庵・女・摩天郎・野迷路・宗義・南柳・柳信・静水・トク子・岳人・正彰・緑水・千万里・米子・葛城・勝晴・花梢・弘生・吸江・天笑・維久子・俊夫・好一・喜風・美幸・玉美・君子・智子・静香・あいき・つき子・庸佑・儀一・葉子。

席題「活字」

浜野奇童選

明暗が隣り合わせにある活字
その穴を埋める活字に迷う汗
合格者名簿の活字は躍つて
活字読む眼にしじみと老を知り
汚職記事記者の怒りを組む活字
テレビラジオ活字に弱い子に育ち
スキヤンダル追う週刊誌の活字
故郷へ活字になって錦着る
キツチリと活字のようになって
習わぬ字辞書の活字のまを書き
三面に背筋が寒くなる活字
開発の活字に故郷揺れている
辞書を引く母へ活字が小さすぎ
静勝花牧百久正鉄俊一好弘太君
香晴梢人志朗児夫一二三津子

席題「紅白」

本田恵二朗選

廉売の活字が女心をつかむ
人生を活字並べたように生かむ
故郷をほめる活字がばやき見え
肝心なところで活字がぼやけても
マスコミをゆさぶる罪な活字かも
活字ぎっしり無言の拍手聞いている
埋め草の活字に汗の匂いする
失言も活字になって叩かれ
情報活字に恐ろしい体験記
情報の活字に恐ろしい体験記
明朝の名刺ペレ帽で出掛け
新聞の活字は量つたよう埋め
本心は活字になつた慌て埋め
目撃の談話活字で僕が載り
いんぎん活字で新聞値上げする
申請書活字の中へ判を押す
活字には無い字でタイフ辞書を繰り
活字工原稿どおり誤植する
見出しだけなめに読んで朝出る
活字にはならぬが街を愛する詩
新聞の活字が暗い朝にする
為政者の笑いへ活字横を向く
活字から声が聞えてくる柳誌
吉報の活字大きく浮いてくる
あいき
好舟
葛城
君客
水志
葵水
柳幸
静水
重松
小松
正人
百重
静馬
柳志
静馬
天笑
静香
舟笑
香舟
俊夫
柳信
つき子

紅白に包むお礼を替えに行き
 紅白へ源平の血がよみがえり
 紅白だんだら妻も女の声になり
 紅白の幕本社の歴史長し
 紅白でしる小物をたしかめり
 紅白幕張つてタコ焼よくかき
 紅白に母子わかれて天高し
 紅白に分れ仲よしベソをかき
 紅白の歴史は紅白つきまとう
 日本餅ハイスを刺戟する
 紅白の中味は黒い包み金
 紅白の余韻の中の除夜の鐘
 紅白に別れはやく女強くなり
 紅白の幕へはのかに菊匂う
 紅白で消えるお金の氣前よさ
 紅白の奮闘振りへ涙する
 紅白絹白絹母の折り目の端切れ箱
 紅白の水引き割り勘の名がらび
 紅白のたれ幕雨がうらめしく
 紅白の裏で裏方目を廻し
 投げ売りをするにも紅白張る商魂
 紅白を重ねて娘盗まれる
 紅白に別れ童心とりもどす
 紅白へ今日の主役はねむたそう
 倅せぬ庭にバラ赤く咲き白く咲く
 紅白でその目出度さをしめく
 紅白の幕のそと側少し妬き
 奇童 弘生 小松園 栗馬 静呂志 醉々 宗義 勝影 好晴 柳志 智吸 宗義 柳子 柳信義 一三子 新之助 美幸 静天 牧笑 花梢 惠朗

兼題「点」 正本水客選

環状線やさかい終点おまへんで
 焦点のずれてきた父じつと視る
 点と点縫なく郵便車がかかる
 生き甲斐を点字点字にかけの夢
 満点の妻でないからほす肩芳子
 点と点追つてルートが定められ 賛

どちらからかより添うた点が線に
 一点を見つめて明日へ賭けてみる
 一点の雲なき空へ父は近き
 焦点をあわすて仮面の顔がある
 焦点をゆつくりとちめて問いた
 終点のなき道自分たず歩く
 句読点きつちり打つて子の手紙
 過ちの汚点が消えていくさん梅
 何もせんようでピリオド父は打ち
 焦点をずらし夫婦のお茶はする
 漁火のひとつひとつにある生活
 この点がみんな蕾になるらしく
 秋の陽に鹿の白点白く映え
 点と点家え始めて旅情安らぐ
 点のない視界にカメラ点を置き
 点結ぶ直線だから生きて見る
 接点でそれから向きを替えて
 顕微鏡点のひとつが気にかかり
 超拡大して網板の点目立ち
 点々と漁火その中に父がおり
 教養の低い会話で妥協点
 点と点つないで企画部長室
 巨大なる地球が点になる宇宙
 盛装へ女は辛い点をつけ
 出稼ぎを送る夕日に点となる
 伊勢遷宮は線にならぬ群れ
 点と点所詮は線にならぬ群れ
 満点にしとこう今日も食えたから
 点やがて線になる日は妻がぬり
 その点はいきさなには楽がぬり
 一点のしみハンカチに許されぬ
 気まぐれに歴史のなかの点になる
 生々庵 鉄児 雀踊子 千子 多志 誓二 葵一 遊水 鬼方 古声 鶴久 岳人 吸江 静香 静水 菜葉 勝晴 花梢 維久 俊夫 俊夫 緑水 正朗 水客

兼題「異色」 菊沢 小松園選

後添はしばらく異色の目で見られ 康博

もどかしい日本語異色デビニューする
 異色人間出世もせずに使われる
 異色あるタレント芸域の広し
 人生を異色の人で世を渡り
 皮膚の色異えど人情に変わりなく
 先代の店を異色でぬりつふし
 学校も異色の教授に授けに困り
 毒舌が異色と意外にひとにされ
 集会で喋り異色の主婦にされ
 異色だったボルノ映画もすでに慣れ
 異色タレント捨てる神あれば拾う神
 異色と言う私の心が錆びてく
 エリート恋は異色の匂いする
 異色とも言われ発明狂とも言われ
 異色作家とうとう頭に来たらしい
 怪蔑の眼で異色見つめられ
 ええとこは鉄をいれた異色作
 見た眼には日本離れの美しさ
 異色外交妥協はこぶしの中にあ
 異色作家時々警察へも呼ばれ
 下戸の家を酒癖悪い子が光り
 デッサンを積んで異色の絵が光り
 異色画家えぬぐだらけで這いま
 どのたん場になつて実力出さ異
 歌手として異色の声がある強味
 山男旅の疲れは山でとり
 メガホンが無理難題の異色作
 異色ある作家片目の猫を撫され
 表彰をされて狂人取り消され
 異色もう忘れて暮す共白髪
 真当に育てた筈に異色の子
 異色画家逆立をして画いたよう
 子沢山の中に異色の子も育ち
 芳賛 季月 祥持 英栄 藤女 清太郎 幸太 日満 誓二 雀踊子 花梢 静馬 静助 新之助 野路 葉江 吸津 新之助 維久 惠朗 文秋 一三 醉々 奇童 維久 百酒 鉄児

鬼遊
 眞実を言へば異色の眼が刺さり
 おんな坂異色に生きる足袋の白
 水客
 生活が異なる異色ははて来る
 いわ
 学生の頃からあの子変りもの
 摩太郎
 酒屋の酒一滴も口にせず
 静江
 出来損ねばかり蔑めて悦に入り
 吸馬
 変り者同志で銀婚式も過ぎ
 柳宏子
 小松園

兼題「ダブル」

貫録がきてダブルの回り椅子
 ダブルベッドの室が空いてたむし旅
 中年肥りのダブルの上衣が似合だし
 嫁と娘のお産嬉しく母の愚痴
 初めてひとりでダブルベッドで寝る
 うっかりと同じ人へヘチム出し
 大安と祝日神主メシもぬき
 待ち呆けおまけに雨まで降ってきた
 物価値上り可ダブルベッドで忘れよう
 滑らかな司会ダブルの服も合い
 イメージの重なる顔が見当らぬ
 学校でダブツタ友に訓えられ
 ダブル巾着うてこどもと対にする
 コンピューターの狂い座席ダブル
 穴道湖の夕陽亡夫と遊んだ山中湖
 美しい山美しくする画集
 式場のダブルがてれる貸衣裳
 お祝いがダブルな遠慮のいらぬ仲
 ダブルの礼状先生の字と秘書の字と
 目のさめるダブルブレに湧く拍手
 寝合券ダブつてひよんな仲になり
 ダンパカダブルの砂煙
 ダブルで返事がかえる妻勝気
 凡九郎
 雀踊子
 生々庵
 勝晴
 奇童
 滋雀
 静馬
 岳人
 綾女
 静馬
 百酒
 水客
 肖遊
 鬼遊
 柳宏子
 千万子
 千万子
 小松園
 英詩
 芳雅
 草子
 祥子

ダブルスのコートで炎えた華の宴
 祝宴が出がダブル車窓の紙コップ
 吉日はダブルダブルのエンポート
 慶びが重なり神経痛言うとれず
 羨望と敵意視線に浮く女
 ダブルスジャン積乱雲が笑つとり
 黒ダブルスジャン積乱雲の風を軒
 初恋は紺のダブルの似合う人
 握手した上から握手する握手
 ダブル着て見たが紳士になりきれず
 同じと二度目話して老を撒く
 ダブルパンチ落選の日に挙げられる
 買い占めで儲け売り惜しみで稼ぎ
 留年も覚悟の上のゲバを振り
 ダブルパンチ男我慢のぞをかみ
 悲しみもダブルは人の冷たすぎ
 ダブルベッド人形と児の夢まどか
 また聞き電話着替がだぶり
 天高しダブルの服と着かえて出
 昼食に済ましたカレーが夜もたぶり
 しくとロマンスグレーに紺ダブル
 の利益はまともに双生児授けられ
 倦怠期ダブルベッドが笑う意地
 赤い羽根つけてダブルの賛とする
 めぐり会い過去のイメージ重ならず
 子雲へ亡母の笑顔をダブル見る
 子欲しやダブルベッドの空虚せる
 金婚と喜寿がダブル銀いぶし
 ふられての戻り財布まですられ
 太茂 茂
 花 佑
 庸 伯
 一三夫
 柳宏子
 炎水
 夢歩
 鬼遊
 弘生
 岳舟
 野迷路
 俊夫
 好一
 好一
 十郎
 喜風
 小松園
 正彰
 幸太郎
 儀馬
 静儀
 醉々
 牧人
 幸人
 美幸
 生々
 多志

兼題「吉報」

じらして じらして 吉報の使者 どんたく
吉報が届き 無医村生き返り 康博
実感が やつと 吉報握りしめ 芳子

島根県芸術文化祭協賛・第10回島根県川柳大会は十一月十一日午前十時三十分開催。会場は木次駅前・しまね信用金庫木次支店三階ホール。

宿題「海」柴田午朗選「夫婦」原独仙選。「自転車」黒田大鳥選「空の旅」津川紫穂選「婚約」藤井明朗選。(各三句宛席題三題)会費三百円(投句納入)の方は百円。ほかに優秀句に選者色紙(投句料二百円)。投稿先島根県木次町役場教委内川柳大会係宛。

吉報とよかる電話のうけ返事
吉報をぬかした吉報に近処泣き
すれ違ひした吉報に近処泣き
吉報の先に來て居た狐かぶり
吉報は遇然でなし押んた厚味
合格の通知抱いたり手んだ味
電報のようなハガキが來た吉報
吉報のウラに誰かの不倖せ
吉報へ母はうるうるするばかせ
吉報を料金不足で届けられ
吉報のハガキ神棚で色褪せ
予定日を間違へ吉報いらたせ
吉報へはかに知恵なき飲み仲間
悪友が蔭で祝つてやるグラス
ゼンイン緩み嵐を衝いてきた受信
吉報へ冷戦中の手を握り
吉報が着き露地の戸がみんな開き
吉報が以外に早いあわてもなし
吉報を足音高く持ち帰る
待ちきれぬ吉報に打水くり返し
野迷路
一天笑
好一舟
柳志城
俊夫
鉄一郎
野迷路
一三夫
綾女
静馬
与志
滋雀
花梢
一三
二
葛城
宗義
萬城
女
生々庵

吉報へ別な心配しはじめる
義理果たすきつけ握るよい知らせ
吉報をまだ疑つてゐる電話口
吉報へ鯛はめでたく身を焼かれ
吉報を待つ秒針が動かない
特選の吉報記者に踏み込ませ
泥の手で吉報かたく握りしめ
アトフが待てず吉報へ旅仕度
吉報がハミングとなる台所
これからの事へ吉報うろたえる
吉報を自分の耳でたしこめる
吉報に悦に入る人妬む人
吉報へダルマの位置を替えさせる
吉報はふところにある梯子酒
吉報の叙勲へ訥々と語る
いい知らせでも人間血圧があがり
吉報をフンフンときく書斎

形水
茂津
維久
一三夫
滋雀
文秋
花梢
太茂津
吸江
凡太郎
静馬
千馬
葉馬
水客
静歩
小松園
栗

〔可筆斎と義理〕

▼以下前月号「路傍」のつづき

分間の柳論

句会のヒナ形のような会が終る。大きな句会では全没の人も、何句かは抜けて気分よく散会する。技両の未熟さを思い知らされて逃げ帰ってきた新人が、はっきりした面もちである。私の眼に映る小集句会の姿である。

難解で知られた時実新子氏の句「柿の種一つを持って飢えている」ある新聞柳壇の近作に対して、選者橋高薫風氏はこう教えてくれる「猿蟹合戦の童話の猿は柿の種を握り飯と替えて空腹を満たした。作者は将来の可能

有信新之助

性を信じて、一つの夢を抱き空腹に耐えている」と。たった三行の評から、将来の可能性を、柿の種という句語に置き替えて表現する術を、私は習うことができた。悲しいことに新聞だから、その後の対話がつかないのだが、この対話のできるのが、小集句会の利点ではないだろうか？ その日の最高点句を組上に載せて、出席者で切り刻むことから、その句をしのぐ佳句が、また新たに世に出ることになるのではないだろうか。

踏まねても人恋う路傍の石の性
路傍の声を集め政治へつきつける
老いばれて路傍の石へと生きる
背かれて路傍の仏を撫でてゆく
大阪の路傍は急ぐ人ばかり
印押して路傍の人となる家裁
未練まだ路傍の人となり切れず
本線の声は路傍から拾い
蹴つまづく路傍の石に教えられ
待ちぼうけ路傍の石に罪はなし
旅の恥路傍気楽な人通り
路傍にも溢れるウソが貼つてある
いきなりは陰にあったモンタージュ
炎天の路傍地蔵も動きだし
今月限り辞める路傍の石拾う
路傍のいちやうも公害に耐えている
喪服とも知らず路傍の犬吠える
顧問という名で路傍の人にされ
会うは別れ路傍の草の名も知らず

涼子
牧宏子
美幸
町紅
六童子
緑雀
柳宏志
柳太郎
新之助
花梢
好幸
唐佑
十郎
好郎
幸太郎

兼題「タイトル」 西尾

琴瑟

片方は路傍の人とは思つてず、アベックの目には路傍の石ばかり振り向いた人が笑うので笑ひ

兼題「タイトル」 西尾 栗選

タイトルの孤独世界中が敵
求人難金の卵とおだてても
ボルノ映画タイトルほどので
横文字をならべタイトル派手に見せ
投了をまつ名人の自若たり
タイトルの有名な人生のタクト振る
タイトルの文字がしたる血に見も
老眼鏡かけてタイトル追つただけ
人間失格タイトルを得た日より
守り抜くタイトル青春は灰色で
タイトルへ裏方さんの名も写り
肩書の一つも持たぬ脱世間
タイトルを奪われファン他人めく
タイトルにやつと名が出てまだ端役
タイトル丈見でチャネルも切替も
タイトルと別に人格欠けるとこ
タイトルの重みはスポンサーがつき
タイトルに我が名を書いた日の奢り
タイトルもオールブライトの名に恥
タイトルはホームブライトで売られ
表題はみんな読みたい週刊誌
タイトルを持統したい眼になりぬ
タイトルを変えた盗作受けている
タイトルもでかか汚職の人となり
タイトルの重さを知つてのVサイン
底辺に生きタイトルのないドラマ
義理捨てた努力をタイトル知つて
タイトルに恩師ライトを受けてくれ
タイトルは革新スマイル都政にて
緑の助

英詩
芳子
好郎
祥月
素郎
鬼焼
肖二
良子
六童子
静歩
金三
たかし
鶴声
柳秋
志見
遊児
滋雀
智子
緑の助
喜美子
孤呂二
滋雀
雀踊子
酔夢
与根一
太津良
舟舟
清人
維久子
静々



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

ささやま、葉の花合同句会 みのる報

本番の世話焼きうろちよるする前夜 与呂志
勝ち抜いて明日への闘志寝つかれず 吸江
明日嫁ぐ灯はいつまでもいつまでも 要保
家の敷居またげば臍を曲げたがり 栗
信仰の裏付けがあるへそ曲り ひか平
逆境を救ってくれた飲み仲間 近江
飲み仲間今日は逃がさぬ肚にいる みのる
デカンショも覚えて青い目が帰国 青峰
アッカンショ鼻緒のきついぞうりぐ 雀踊子
蜆貝恋の気配へ瞳を閉じ 鬼遊
氣にくわぬ気配とみたか咳払い いわお
粗忽でもよし元気な父でいてほしい 越山
傷口にうっかりふれた日の粗忽 弥生
孫連れて、歩く散歩に駅を入れ 英断
一寸散歩に出たのが酔って帰って来 牧人
金婚の妻が踊った驚娘 醉々
くらしから抜けて踊りの輪に染まる 岳人
川柳東大阪 竹中肖二報

颯爽とチャック開いていたモード 滋雀
ふところのチャックが美人に弱す 柳信
軍歴のないのが反戦ピラを刷る 六龍子
大物の魚拓ボクの手添えて刷る 古方
名刺では社長市場の果物屋 ひろお
色刷りが実物凌ぐあざやかさ 儀一
貫録をつけるヒゲでも生やそうか 智水
貫録に巡査コロツだまされる 悦郎
貫録のない掃除夫をやめられず 葵二
肩書を捨てて平和な暮しする 肖二
肩書をぬいで夕餉の妻の酌 喜風
肩書が新幹線へそりかえり 三十四
肩書が増えてみிறは減ってゆき 綾女
肩書がないから無茶な事も云い 文秋
たつぷりと湯槽に気兼ねな肥満体 あいき
たつぷりと墨何を話し出すか筆 凡九郎
たつぷりと出る乳捨てて職に生き 静香
顕微鏡元素としての錫の肌 雀踊子

南大阪川柳会 金井文秋報
娘の家の便利さ母は落ちつけず あいき
便利車のように救急使われる 喜風
犠牲者が出てから歩道つくりかけ 一舟
目立つよう目立たぬように待つ歩道 好郎
腕白を歩道へもどすに母疲れ 綾女
押し売りの方が不安になる素直 二二
ハイハイの素直いつまで新人社 章雅
臍抜けやろかこんなことに素直 古方
手術台云うほど素直にはなれず 千万子
代読ヘリボン素直にぶら下り 葵水
いたずらな風が女に還らせる 滋雀
はじらいのふたりへカメラ容赦せず 俊夫

東大阪市文化祭第一回川柳大会

日時 十一月十八日(日) 正午開場
会場 東大阪市中央公民館二階 視聴覚教室(近鉄永和駅南、市民会館内)

講演 吉川英治と川柳・若本多久志氏
兼題及選者(選者、雅号のイロハ順)

雀 握る 西村芳川氏
アルバイト 金多柳志氏
音 田中泉萬樂氏
約東 増井不二也氏
菊 菊 崎山小松園氏
叙位・叙勲 崎山明氏
はのぼの 竹中肖二氏
二題(題及び選者は当日発表)
兼・席題共各題二句以内(締切一時半厳守)

出句題 出句は出席者に限ります
賞 席題・兼題とも秀句に、東大阪市長ほか。
会費 三百円(呈記念品及び大会句報) 主催 東大阪市文化連盟 東大阪市川柳同好会

参観日そとははじらう子の答儀一
経験の豊富さ夫の巾となり美人幸
経験をたよりに夫婦の綱渡り 牧人
五十一年の経験人生まだ解けず 千梢
こというときに経験生きてくる 静馬
恋たのし幻が逢いにきてくれる 一栄
幻の海へ花東投げに来る 金三
幻でもよい焼きつく胸のひと 太茂津

川柳たけはら

森井菴居報

セツトから帰った妻にヒゲがある 静水
親子って夫婦？ 思いめぐり日の在 房子
キャンプ村ひとつにさせる炎も燃え 蘭幸
善人であれば倅せになるドラマ 政己
故郷の静けさ島の陽が暮れる 千代美
一瞬で散るから花火美しい 文晴
天国へ行くロープウェイかも知れず 笑一路
道端の草も真夏という匂い 一のぼら
生甲斐を人には告げず水を打つ 菴居
金策がつき実印をほつとさせ そのみ
ついカットとなった若さを自省する いと
かいがんでのをフアンタががした 不朽
黒い鳩ひととき放つ花火かな 雅鳳
人情に負けて我が意が通されず 鬼焼
切り札の涙が乾く一人ぼち 貞子
お上手を並べて何を売る女 美佐雄
マドロスのリズムウィスキーが知 英詩
追伸の中で本音を匂わせる 文明
暖かい心がとける角砂糖 西合
明日なんかなくてもいいさあかね 水
バラの莉バラの生命をためて 扇水

川柳大阪

児島与呂志報

義理でする親切だからいや味出る 徹舟
物価高どこで儲ける奴がおる 漁人
脂甲斐ない俺と知つても悔いぬ妻 誓二
素直な嫁で姑の気に入られ 三十四
半どんじや仕事にならず二休制 本蔭樺
朝の茶へ先ず幸福を意識する 一乃字
年頃はブスも陽焼けに気をくばり 寿
入賞の涙陽焼けへ一つ落ち 道子

一反を守る陽焼けの老夫婦 笑風
泣いて済む涙男にあるものか 重人
花の色団地の白に赤に染め 洛醉
ケケチと飲んで最終乗り遅れ 胡蝶
ささやきを気にして出かける共稼ぎ 晴道
ほいて腹社長さんかと間違われ 敏
陽焼けした男臭さへ惚れぬかれ 太茂津
健康美難行苦行甲羅干す 吞歩利
気休めの言葉へ或る日の男馬鹿 六竜子
気休めに云つた言葉が命とり 徳松
嫁ぐ日は仕掛花火のプロロオグ 与呂志
和歌山七面會 中筋三幸報

妾宅と親類付き合ひさす手腕 富子
反戦へ決意戦友の指がない 政夫
ロツカーに母を着替えて夜の蝶 ひさ子
Vサイン送る指先自信満つ 淳子
ロツカーの前で辞表を読み返す ふく代
親類も代が替りて無沙汰なり 勇次
死の爪となりゆく母の指を組む 葵水
親類が寄つて先祖を語る夜 清治
家柄に合わぬ親類一つ増え 凡夫
水すくう十指に残る何ものなし 一悟
ロツカーは手軽に嬰兒の捨て処 三幸
決心へ女が指で引くルージュ しずこ
ロツカーのミラーで眉を細くひく 幸
駒つなぎ 岸南柳報
二次会へ呼んでくどいた今の妻 規一朗
夕立へ二次会流れもせず待ち 岳人
二次会で気炎あげてる平社員 柳信
二次会のもう終電も気にかげず 育園

二次会の相手になれる妻でよし 摩太郎
二次会でもう離さない離れない 小松園
二次会はいつものところわかる仲 儀一
二次会へ明日の事は考えず 悟郎
オイ新婚帰えれと二次会止めさせ 醉水
二次会に飲めない顔が義理に居る 石捨
仲人は血筋の方を重くいい 綾女
争えぬ血筋絵が好き歌が好き 二
眉までも乱れ女の倦怠期 肖二
親子してこども気短かという血筋 美代
二次会というて彼女と別な席 南都
公害に近江八景追い出され 多津緒
八の字の髪がいつもの立候補 はや
二次会で待っていましたしういのど 小路
京都塔の会 松川杜報
友情の冷たい言葉も使うてみ 水客
クーラーの冷えを感じるドアを押し 誠史

佳句地10選

(前月号から) 谷垣史好選

若肌へしびき弾けて夏光る 己恭
熱い手に味方の気配感じとり 三幸
夕立ちが晴れてさよなら云いなおし 初音
下校して今日は道中に出る化粧 芽十
水道の出が悪くなる日の暑さ 栄
風鈴のかすかな音に昼寝する 栄
親の夢子の夢花火の下に佇つ 菁居
板前の意気銅鑼を磨き上げ 綾女
渦一つ消えて夜明けに蚊が落ちた 岳人
流す湯もひっそり母の終い風呂 誓二

— 62 —

転落の女に狂う日がめぐる
友達に秀才はなし平和だ
一本の箸で事足る焼芋屋
どう断わるうかストローもて遊び
ストローを折って今夜は諦める
正直に生きてはるから狂うんサ
S L の煙 郷愁 なびかせる
下つみに耐える歩中狂わな
秀才の苦手な運動会迫る
狂う時計を毎日巻いている暮し
ストローを折って丸めた待ち呆け
ストローから恋が生れた喫茶店
財閥へ靡く閑僚の腹は肥え
秀才は幾何学的に恋をする

城北明朗句会

川口弘生報

矢車は五月謳歌の音で鳴り
五月晴れ今日もお土産もらう役
武者人形五月の座敷いかめしい
孫の五指爪の形も血が通い
ライバルが四、五人訪うて個展の灯
病床の窓から頼な五月空
五月晴メーデーの歌こだまする
五里霧中捜査は白紙から始め
浪人も一寸散歩の五月晴れ
そろばんの身を細めてる五つ玉
私の資本五体に傷がなし
菖蒲湯につかっただけで若返り
五階まで息子訪ねて歩かされ
五人囃子それぞれの顔で座をしめる
五目ずしつくる手順に母しのび
造幣局明治娘も通り抜け

春果 満津子 繁子 紫津 静歩 茶坊 三十四 鉄児 弘生 駒子 濁水 肖二 綾女 典子 秀村

夜の蝶かブルーの色の似合う人
結婚を許さぬ父が孫を抱き
歩こうよせかせかする世に逆うて
大事にも動ぜず小事見のがさず

川柳しんぐう

大矢十郎報

湯かげんはよろしおすかと京の宿
湯かげんの良さへ露天の長談議
湯かげんも見ず鳥肌立でている
台風が来ねば来ないで記事となり
来たよりはまし台風の釘を抜く
台風の進路に母の国がある
墨こんを乾かすだけのお手伝い
手伝うてくれは逢いたい下心
サンダルが一つ残され海も秋
断崖のサンダルだけが知る不倖
湯かげんは湯まかせ母のしまい風呂

川柳ウイロー社(ハワイ) 林蒼蛇樓報

写真へは借金返えせとも言えず
新婚の写真子供に冷やかされ
大写真には勝てぬ顔のしわ
黒粋の写真の友に目でわびる
慰霊碑の写真にしのぶ開拓史
ほめられて焼き増しに出すよい写真
物言わぬ写真にレイをかけて去に
色褪せた写真移民史一ページ
亡き母に抱かれた写真古稀迎え
青写真未来の我が家へ夢を持ち
亡き父母の写真に詫びる親不孝
写真花嫁今は孫子にかこまれて
アルバムをめくる想い出走馬燈

つね 生仏 志津 平 賛 入道 まさ子 弘生 雀踊子 喜一郎 富子 十郎 輪 十郎

第25回大阪文化祭川柳大会

日時 11月11日(日) 10時開場—12時半開
会。

会場 中央公会堂(3階小集會室)
兼講演 堀口 塊人氏
兼題 「私に人間です」 「近頃の社会記事から」

写したは皆ピンボケで見せられず
恵まれぬ顔が写真によくうつり
新婚の写真も古りて五十年
写真見て在りし日偲ぶひとり言
御真影二世の家にも菊薫る
色あせた父母の写真に語りかけ
自分とは見えぬ幼時の古写真
写真帳色あせている齢となり

椰子郎 三石 快夢 千枝 河舟 千鳥 雲海 草海

「つけ焼刃」 広瀬 反省選
「神」 中島生々庵選
「橋」 永田 帆船選
「大阪名物」 谷口 光穂選
「城」 岸田万彩郎選
「城」 久保田以兆選

席題 各題2句以内(締切正午) 出句は出
席者に限ります。
賞 席・兼題とも秀句に、府知事、大阪
市長、府市教育委員長から川柳賞。
入選句集は三〇〇円。当日申込受付
主催、大阪府・大阪市・大阪府教育
委員会・大阪市教育委員会

川柳塔社同人総参加ノ（一人二句以内）

新年号を飾る「ユーモア特集」

（十二月二十五日着便）

川柳に忘れられているものはユーモアである。そのユーモア味のある川柳で新年号を飾っていただきたいのです。

年賀広告受付

本誌六分の一段二千円です。
グループをおもちの方もご利用ください。

★原稿締切・十一月末日

あなたもゼヒ一口

この寸法が400円
になりました

川柳塔社

指替口座大阪
三三五六九番

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）若本 多久志 選
水煙抄（10句）北川 春巢 選

課題吟（各題5句以内）

募
「虎」 宮川 珠笑 選
「振り袖」 林 瑞枝 選
「日の丸」 水粉 千翁 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）若本 多久志 選
水煙抄（10句）北川 春巢 選

課題吟（各題5句以内）

「福」 岡田 拳法 選
「ドン底」 岸 南柳 選
「円満」 藤井 春日 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

古方手書き句集 ¥800

「肉眼」刊行記念句会

日時 十一月四日（日）午後一時
会場 大阪府中小企業文化会館（5F）
電話（771）4096

（天王寺区上汐町五丁目二五・地下鉄谷町下車）

（今月の出題・板尾 岳人）

兼題 柳 話
「瘦身」
「豊か」
「肉眼」
席題 三題 当日発表
会費 二百円

西 川 香 高 小 橋
尾 川 杉 鬼 牧 高 高
選 選 選 選 選 選 選 選
柴 葉 選 選 選 選 選 選 選 選

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

12月の兼題「裏番」 「八方塞り」 「はったり」

定価 二百円（送料十六円）
半年分 千二百九十円（送料共）
一年分 二千四百円（送料共）

昭和四十八年 十月二十五日印刷
昭和四十八年 十一月一日発行

編集者 大阪市内南区鰻谷仲之町二〇番地
発行人 中島 蓬太郎

印刷所 太陽印刷株式会社
郵便番号 542

発行所 大阪市内南区鰻谷仲之町二〇番地
川柳塔社

電話 大阪・（二七）一三九八五番
振替口座 大阪・三三三八番

・ペンペン草・

★十一月は「文化」の大バーゲンセールで、イヤハヤもう、なんでも文化、文化だが、いったいブンカってエンをばさんだろと新聞の三面を見ながら考えこんでしまう。

★秋の夜長——ソレ新婚さんが……。なんて書いたたらまたどっかでサカナにされるだろうから、ここでは灯下親しむ秋の夜長と逃げておこう。

★さて、秋の夜長だが、ぼくのように年中夜だけ仕事

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほか5ミリ錠

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

28

葉子コーナー

▼戦後、汁物に魚の団子をよく食べさせられまして。おみおつけ、お吸物に小鯛、小鯉等骨ごと和鉢ですり団子にして入れて食べるのです。とても美味しう食べ物でした。そのころ岳人様も大阪で食べておられたらしいです。私は北海道です。なつかしい味と思ひ出です。

をしてる者には、この秋の夜長がちよっともピンとこないんだ。そこでぼくの夜行性は、いつごろからこうなったのかと、指にペンをばさんだまま頰杖をつき考えてみた。

★うちがまだ印刷業をしていたころ、立川文庫を卒業したばかりに、母が女学校時代に愛読した黒岩涙香訳の「死美人」のおもしろさをおしえてくれた。それから「噫無情」や「綴窟王」などの涙香物を片っぱしから読破していった。ご承知のようにアレを読みだしたる途中でペーじにしろしをはさむことができなくな。一気に読んで、読み終わったらいつも朝になって

いた。

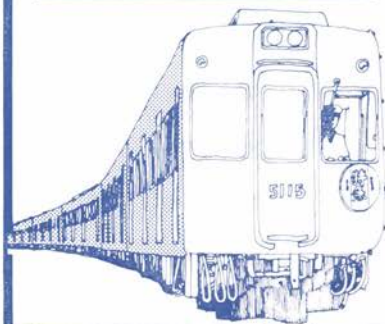
★職人氣質のオヤジがとうとう怒りだした。朝寝はまどういとして、いい若い者が毎日ゴロゴロ昼寝するとはなんたることだ。というのだ。ぼく自身も朝食は七時、昼食は十二時、夕食が六時と、時計に主導権をにぎられていたような生活は真っ平だったし、指の爪に藍や黒のインクがしみこんでいる指先きでペーじをくったりペンを持つのは我慢がならなかった。ここで完全断絶だ。

★そのころ梅田堂山町にある本邦随一の映画雑誌社から招かれていたので、家業とも断絶して編集屋のタマゴとなったわけ。ここではありがたいことに朝食さえ棒にふるつもりなら昼まで寝ていても誰も文句をいわない。

★梅田から千日前までの市電片道金六銭ナリさえ都合がつけば、そこには帰りのタクシード代ぐらいはなんとかしてくれる道順堀のネオン族がいた。カフエー（古いなア）へはいつてタダのウオーターだけで何時間ねばっていてもイヤな顔ひと

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



つしなない。そのころの活動屋（映画人）はモテたのでね。ぼくの夜行性はこのあたりで決定的となったようである。

★このよき世界をぼくの短気から飛び出し、いつかも書いたように関西屈指の大親分が経営する劇場専門の印刷所がこれまた夜の仕事をきった。色版画工（版下書き）が朝から午後二時ごろまでに黄版と赤版を書く。それを工場ですり出し、藍版と上りの黒版（四度刷りの場合）が刷りおわると夜の十一時ごろ、それから仕上げるのピラ張りの部へまわる。全紙を二枚つなぐの

や、全紙と半紙をノリでくつつける作業がすむと配達する市内の映画館や劇場へ自転車で積んで届ける。そんなわけでも毎晩二時三時になるためここでも昼まで寝ることになる。ぼくの夜行性はいいよホンモノになっていく。

★この印刷屋も戦争で討死したが、戦後にやったのが映画館の売店、これも昼まで寝られる夜の仕事だ。

★もう今さらどうにも止まらない。夜があるからぼくがあるようである。ただ一つ、胸の張れることは、近所の盗難防止になっていることだ。（不二田一三夫）

